
腹黒神様と不幸な少年

八百奈 雨人沙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腹黒神様と不幸な少年

【Nコード】

N1855L

【作者名】

八百奈 雨人沙

【あらすじ】

超不幸体質な俺はある日、かなえと名乗る胡散臭いこと極まりない自称土地神の銀髪女に出会った。俺が幸せになるには結婚しなければならぬなどと、どこかの詐欺師みたいなことを抜かす腹黒女神かなえ。

だけどな、かなえ。

俺は、幸せなんか望んじやいないんだよ——。

NGシーン集・表紙編・

トレース
撮影、開始——。

超不幸体質な俺はある日、
かなえと名乗る胡散臭いこと極まりない自称土地神の銀髪女に出会
った。

俺が幸せになるには結婚しなければならなど、どこかの詐欺
師みたいなことを抜かす腹黒女神かなえ。

だけどな、かなえ。

俺は、

幸せなんか望んじやいないんだよ——。

少年は、選択する。

「敗けてやらない。それが、誓いだから」

少女達は、決意する。

「決めたのよ。あいつの隣に立つて」

「すーちゃんに出逢えたけ、こんなにも幸せ。だから今度は、わたしのばん」

「初めて会ったあの時から、私は君の笑顔が大好きなんだよ？」

「ぬふー、良い匂い」

「枢様っ！ここは真面目な場面です！」

「《次々とハーレムを形成する主人公、ただし鈍感野郎》みたいなっ！」

「ち、千紗様まで……っ！」

「なんというシリアスブレイカー。あ、僕男だから自重しなきゃダメかな？ 上のキャッチフレーズの考えて」

「ひ、一人では突っ込みきれません！」

「お前らな……」

「……やっぱりこの面子でシリアスは無謀だったかしら」

「えへへ、いつも通り……っ！」

「いや、まあそうなんだが。そんな可愛らしく言われても……「惚れてまうやろ」妙な台詞を被せるな留美奈！ とうかいいい加減

離れる枢！」

「えー。やつ！です」

「やつ！ですじゃなくてだな……「惚れてまうやろ」誰が惚れるか！」

「……ロリコン」

「合法ロリだけでは飽きたらずガチ幼女にまで手を出すなんて、見上げたロリコンだね」

「よし、そこになおれお前ら」

「きゃー、昴君が怒ったー！……さて、ふざけるのはこのくらいにして、あとはかなえ様の真面目な台詞で適当に締めとけばいいか」

「妾、そんな才チ的な扱いなのか！？」

「はい、皆真面目にいくよー！」

「このギャグに染まりきった緩い空気の中シリアスをやれと！？
鬼かお主ら！」

「ハイ3、2、1——」

「本気で覚えておれよお主らああッ！」

撮影、再開。

そして女神は――。

「^{あがな}贖いは此処にある。だからどうか、救ってやっておくれ。それが妾の、唯一の願いなのだから――」

「はいカット！ やー、お疲れみんな」

「ここまでぶち壊しな表紙が今までであったかしら……」

「そもそものつけからふざけてるんだけどね。どこの赤い弓兵さ」

「ついカッとなってやった。反省も後悔もしていない」

「しろよ」

「ふ、ふふふ。この恨み果らさでおくべきか……」

「あ、もう余白ないよ？」

「なん……じゃと……。くっ、いい気になるなよ、妾を倒したところで第2第3の妾が……」

「どこの魔王だ貴様は」

「というわけで、ギャグとシリアスと萌えの腹黒神様と不幸な少年、
どうぞお楽しみあれ！」

NGシーン集・表紙編・（後書き）

初めましての方はごめんなさい。
久しぶりの方はもっとごめんなさい。

八百奈です。

テスト前で3月まで暇なしなので、取りあえず繋ぎ的な感じでパパッと書いてみた次第です。

メリークリスマスもあけましておめでとうございますも言えなくなっていました。寒中見舞いが関の山です。

あ、ちょうど節分だ……って痛っ！

豆を投げないで、八百奈は鬼じゃありません！

え、ええと……テストが終われば一月春休みですので、それまで待つて頂けるとこれ幸いです。

序章 不幸な少年のお話 - The God of Death - (前書き)

この物語はフィクションです。実在する人物、団体、事件とは一切関係ありません。

序章 不幸な少年のお話 - The God of Death -

誰しも、生まれつきどうしようもないことはある。容姿に恵まれていなかったり、親に恵まれていなかったり、運に恵まれていなかったり。

しかし、与えられた環境の中で選択するのは自分自身だ。そもそも、早々都合よく、道筋を示してくれたりする運命など、味方についていないだろう。

だから、自分で決断するのだ。誰でもない、自分の意志で、自分の進む先を。

——何の事は無い。ただ、人として当然の選択だ。

そして俺は、選んだ。

この広い世界で、たった一人でも生きていけるよう、強くなることを。二度と後悔しないために、強くなることを。

そしてまた、俺はとある選択をする。

己と共に在ると決めた少女達のため。

自らに課せられた、過酷な運命に抗うため。

——これはそんな、一人の少年の、非現実的で波乱万丈な恋物語——。

「おい、ちょっとツラ貸せや」

これが俺、蘭昂らんおうが十七年間生きてきた中で、最も多く言われた台詞だった。他の追隨を許さぬ、驚異の記録である。

不良やヤクザだけでなく、何故か同年代の女子にまで、似たニュアンスの言葉を投げかけられる始末だ。いくら自分が悪人顔だからとはいえ、流石に泣きたくなる。

おそらくこれから先、この記録は不動のものであると確信している。何故断言できるかと問われれば、今まさに、言われている真っ最中だからだ。

「おい、聞いてんのかテメエ！」

俺を壁に押さえつけて怒鳴り散らしている中年男性。その容貌は、茶髪のパンチパーマ、頬の刀傷、その辺の野良犬なら射殺せそうな鋭く上がった目つき。どこからどう見ても、堅気には到底見えない。

「こつち見ろや！ ビビってんのか！？ あ？」

正直、唾が顔にかかってかなり不愉快だ。何故こんな事態になっているのかと言うと、話は数分前に遡る。

〃

午後七時。

辺りが薄暗くなり、徐々に闇に包まれて来た頃、俺は駅前の広場に居た。周囲をキョロキョロと忙しく見渡し、広場をくまなく歩

き回っている。

広場にはまだ人がまばらに居た。犬の散歩をしている人、ベンチに腰掛けている人、ジョギングをしている人など、それぞれが思い思いに時間を過ごしている。

普通なら、奇異な行動に対し少々気には留めても、ただの通行人などに長い間注目する人はいないだろう。

だというのに、広場中の人間の視線を感じるこの状況はどういうことか。

「……？」

訝しげに思い、チラリと視線を感じる方を向けば、慌てて目を逸らされた。

(……まあ、悪人顔が目ギラつかせて歩き回っていれば、注目もされるか)

どうやら俺は生まれつき目付きが悪いらしい。初対面の人間には、目があっただけで息を吞まれたり、顔を逸らされたりする。

今も、さしずめ周囲からは、誰かをシメようと探し回っているように思われているのだろう。探し回っているのは事実だが、探している対象は、人ではなく、先刻落としてしまった財布だった。

あれには今晚の夕食代や、クレジットカード諸々が入っている。そして今現在、ウチの冷蔵庫の中身は、先日の落雷による停電で全滅してしまっている。

故に、是が非でも財布を見つけなければならない。主に先ほどから感じる多大な空腹感から逃れる為に。

「はあ……。どこで落としたんだ？ 一体」

この辺りで落としたのはほぼ間違いない。半刻程前に、ここであつかり転んでしまったからだ。おそらくその時にズボンのポケットから落としてしまったのだろう。

別にドジというわけではない。ただ、運がないだけだ。絶望的な程に。だから、下を向いて歩き回っていて、うっかり最悪な類いの人間にぶつかってしまったたりする。

「っと、すいませ——」

「どこ見て歩いてやがるデメエー!!」

顔を上げてぶつかった相手を確認するなり、俺は眉をしかめた。ああ、また面倒な事になった、と。それから怒涛の勢いでヤクザに絡まれて、今に至る。

自分が死神にでも憑かれてしまったような超不幸体質だと気付いたのは、物心つく前だった。

最初に疑問に思ったのは、両親。事ある毎に運の悪い出来事に見舞われる俺に、次第にその必然性を否応なしに理解するようになった。

何故、こんな不幸が俺に宿ったのか。俺はその疑問に対して、自然と理解するようになった。

嫌われていたのだろう、神に。

忌み子としてこの世に生み出され、人を呪い、人に憎まれながら死ぬ。そんな筋書きを立てて、せせら笑っているに違いない。

だからこそ。

俺は自らに降りかかる不幸をすべからく叩きのめし、鼻で嘲笑^{わら}つてやるのだ。

神ごときに、この俺が負けてやるものか。敗けてやらない。そう

誓ったのだから。たかが神ごときに、俺様が負けてたまるか。

「ちよつと事務所来いやガキ。舐めた真似してつとどうなるか教えてやる」

そう言つて男は俺を車に押し込んだ。ちようど良い。少し、ムシヤクシヤしていたところだ。

記念すべき百回目となる事務所訪問が、始まりを告げた。

）
）

「……ああ、もしもし。俺です。——ええ、また例のです。二丁目の極亜久建設事務所つてトコですね。ドラッグなどの違法物品は既にあるだけ纏めて置いてありますので。ああ、それといつものように救急車の手配もお願いします。ええ、十七人分。意識レベルは低いです、命に別状はありませんので。はい、それじゃ、ご苦労をかけます。はは、文句は俺じゃなくて連中に言ってくださいよ。俺はただ身に降りかかる火の粉を払っているだけなんですから。………そこで謝られても困るんですが。とにかく、よろしくお願いします。それじゃ、失礼します」

電話を切る。蓮土さんが恨めしそうな声を上げていたが、いつもの事なので放っておく。普通に警察に通報したら調書等を含めて何十倍も時間がかかってしまうので、知り合いの刑事に連絡したほうが楽なのだ。

事務所を出ると、三十分も無駄にしていた。空は既に夕闇に染まり、遠方に微かに日の光が照らされて見えるのみだった。今は七時半を少し過ぎたところだ。

「結構時間をくつたな……。ここからじゃスーパーは遠いし、今日はコンビニ弁当にしておくか」

もともと駅前のスーパーに向かう途中だったのだが、面倒になってきたこともあるし、夕飯の買い物は断念することにした。

仕方ないから今日は体に悪そうなコンビニ弁当にしておこう。

幼い頃両親と姉が他界してしまい、俺は現在一人暮らしをしている。

料理は世話焼きの幼なじみに『一人暮らしで自炊のスキルは必要でしょ？』と、教え込まれたのだが、慣れてくると段々楽しくなってきた事もあり、なるべく自炊を心がけている。

「……っと。途中で自転車に乗って行った方が早いな。一度家に寄るか」

ここから一番近いコンビニの間には、ちょうど自宅がはさんでいる。大通りから直接コンビニには向かわず、住宅街を通って行くことにした。

明日の朝刊には『暴力団事務所壊滅』の見出しが出るだろう。組長以下、組員全員重体の記事と共に。

昔から何かと不幸に巻き込まれるので、この程度の荒事には慣れている。たかがヤクザごときに遅れを取ったりはしない。

というか、かすり傷一つでも負えば、師匠に殺されるしな。

などと戯言めいたことを考えながら、俺は自宅へと歩みを進めた。

一方。昴が連れ込まれた事務所の最上階で、一人の男が奇跡的に意識を回復した。

「つぐ……う……！」

首筋に走る鈍痛に耐えながらも、周囲を見渡す。自分と同じ組員や組長が、一人残らず地面に倒れていた。どうやら皆、命に別状はないようだ。

自分の置かれている状況を把握してから、男は、つい先程連れ込まれてきた少年の事を思い出していた。

ニヤニヤと笑みを浮かべる仲間達に囲まれながら、怯えるでもなく、ただこの世の全てを嘆くように放った一言。

『不幸というか何というか。まったく、どいつもこいつも……。おい、貴様ら。今から不幸のおすそ分けをしてやる。ありがたく受け取れ』

そこから先、男の目に飛び込んできたのは、圧倒的な暴力。まるで影を縫うように少年が駆け抜け、次から次へと仲間達が倒れていく光景。

呆然としている自分に、少年が狙いを定めて来たのが分かったが、体が動かず、ただ立ちすくむだけ。

——ああ。俺達は、喧嘩を売る相手を間違えてしまったんだ——

それから男は、素早く、そして的確に意識を刈り取られた。ふと、思い出す。この近辺で、自分のような闇に住む人間の間で、まことしやかに囁かれている存在がいることを。

その存在に関わった組はことごとく潰れ、圧倒的で理不尽なまでの暴力で全てを蹂躪し、銃やナイフでは太刀打ちできない、と。その噂を聞いたとき、男はそれを下らない与太話だと一笑した。そんな馬鹿な話がある訳がない、と。目の前に広がる光景をぼんやりと眺め、男はその存在の名を呟く。

「死神——……」

男の呟きは、誰にも届くことなく、虚空へと溶けて消えた。

〃
〃

一度自宅に帰り、自転車に乗ってそこから近くのコンビニに向かうが、何せ家が住宅街のど真ん中にあるので、それなりの距離がある。

俺は今、住宅街の外れにある神社に続く道を通っている。この道は街灯が少なくて夜は暗くなるので、少々注意が必要である。もともと、俺は注意しようがなんだろうが、かなりの高確率で事故に遭ってしまふのだが。

地元でもそれなりの大きさを誇る神社の前を差し掛かると、見知った顔を発見したので、自転車のブレーキをかけた。

「よう、チルハ」

「あ、すーちゃん……っ！ えへへ、こんばんはー」

肩まであるセミロングの黒髪に、パツチリとした瞳。

俺が通っている、私立燈ノ宮学園の一つ下の後輩である如月散葉きつひきが、いつも通りのぼわぼわとした柔らかな笑みを浮かべ、神社の石段に座っていた状態から立ち上がる。

トレードマークの薄い水色のリボンを揺らしながら、こちらへトタトタと駆け下りてきた。一番下に下り立ち、街灯に照らされたチルハは、赤い袴の巫女装束姿だった。

勿論チルハの趣味などではなく、チルハが本物の巫女だからだ。本人の可愛い容貌と相まって、庇護欲をそそるような、愛くるしい雰囲気を醸し出している。

「すーちゃんはこれからお買い物？」

「ああ、ちよつとそのコンビニまでな。チルハはそんな所に座って何をしていたんだ？ もう時間も遅いのに」

三月とはいえ、まだまだ肌寒い。わざわざ石段に座っていたのは、何か用事があつての事だろう。

「私は依頼人を待つとるんよ」
「依頼人？」

思わず聞き返した俺に、チルハは少し照れ臭そうに話し出す。

「うん。除霊の依頼なんよ。やけ、ここで待ってるの」

そう、チルハはこれでも腕利きの霊能力者らしい。それにしても、一般的な巫女さんに比べて髪が少々短いのだが、それについて本人に尋ねてみたことはない。

巫女の髪には霊力が宿り、それを切ると霊力を落とすとまで言われているのだから、何か事情があるのだろう。

「そうか。頑張れよ」

そう言っ、いつものようにチルハの頭を撫でる。チルハは頭の上に傾けながら、気持ち良さそうに目を細めている。

手触りの良さを堪能してから俺が手を離すと、チルハの髪はサラサラと整った状態に戻った。

「えへへ……うん！　頑張る！」

「ああ、じゃあな」

じゃあねー、と手を振るチルハに見送られ、俺は再びコンビニに向かった。

自転車をコンビニの前に停めて店内に入ると、近所に住む、顔馴染みの店員がレジにいた。

「こんばんは、倉田さん」

「あら、こんな時間に珍しいね」

俺の挨拶に笑顔で答えてくれた。俺の見た目を気にしない、いい人だ。

「どうしたの？」

他に客がいないので、倉田さんは話し掛けて来た。

「ええ、ちよつと弁当を買いに」

「あら？　この時間にはほとんどお弁当は売り切れちゃってるわよ」
「何っ!？」

思わず倉田さんの顔面に迫ってしまふ。

「あら、目の保養」

わけのわからないことを言う。とにかく慌てて弁当コーナーに向かったが、確かにガランとしていた。

「次の配送は九時過ぎよ」

倉田さんのセリフは俺にとって死の宣告だった。腹が減って目眩がしそうだ。成長期の健全男子に夕飯無しは死刑に等しい。

しかし、弁当コーナーを良く見れば、一個だけ弁当が残っていた。

「助かった……」

安堵の溜め息をもらしながら、弁当を持ってレジに置くと、倉田さんはレジを打った。

「500円のお弁当が一点ね」

俺はポケットから財布を取り出そうとポケットに手を突っ込んで、そのまま凍りついた。

「……あ」

「ど、どうしたの？」

茫然自失とした俺に、倉田さんは驚いた様子で尋ねてくる。俺とすることが、すっかり忘れていた。

駅前の広場を散々探し回り、ヤクザに絡まれ、コンビニ弁当を買うはめになった原因を。

「……財布を落としたのを忘れていた」

……。

「あら」

（俺のみが）気まずい沈黙に包まれた後、他人事の様な倉田さんの声が、店内に響いた。実際他人事なのだが。困った。どうしたものか……。

「……倉田さん」

「貸してあげたいのはやまやまなんだけどねー、今日は生憎飲み物代しか持ち合わせてないのよ」

藁にもすがる思いで倉田さんに頼み込むも、残念な返答が返ってくる。今晚は晩飯抜きで耐えきるしかないか、と半ば諦めかけていたその時。誰かがすつと俺の横に立ち、レジにペットボトルの飲料と千円札を置いた。

「会計は一緒にして下さい。飲み物は袋に入れないで結構ですから」
その救いの声に顔を横に向けると、見馴れた幼なじみの姿があった。

きめの細かい白く健康そうな肌と、艶やかで瑞々しい、銀がかったショートの黒髪。端麗な容姿が持つ、鋭利な硬さ——不可侵の気品なようなものが、うつすらと漂っている。それとは裏腹に、理知的な瞳の奥には、さりげない心遣いがうつる。

「……湊？ どうしてこんな時間に……」

「ただの散歩の途中よ。そしたら昴の姿を見かけたから」

墜月湊。ついでつみなと 俺と同年の幼なじみで、同じく私立燈ノ宮学園に通っている二年生だ。

常に冷静沈着で、社交性もあり、加えて誰もが目を引く端正な顔立ちをしているため、同年代の異性だけでなく同性からの人気も高い。

墜月家は古くから武術の名門として名高く、現当主である湊の祖父、墜月銀蔵は、俺の師でもあり、幼い頃から世話になっている。

「お釣りは248円のお返しです」

俺と湊が会話している間に、倉田さんは既に会計を済ませたようだ。

「助かった。本当にどうしようかと思っていたところだったんだ」
「それは構わないけれど、そんなもの食べるくらいならウチに食べに来れば良いのに」

あまり歓迎したくない話題に、眉をややしかめる。

「……今更そこまで世話になるつもりはない。俺はもうあの家を出た身だ」

内弟子として世話になるよりも前。家族と死別して、身寄りのない俺を引き取ってくれたのは、墜月家だった。墜月の人たちが優しく厳しく接してきてくれたおかげで、今の俺はある。

だからこそ、高校への入学と時期を同じくして、もともと自分が住んでいた家に戻った。あそこは、あまりにも居心地がよすぎるから。

俺は、一人でいい。

「……別に、そんなこと気にしなくてもいいのに」

「まあ、今日はたまたまだ。普段はきちんとした食事をとってるよ。誰かさんが親切に教えてくれたからな」

どこか寂しそうにポツリともらす湊に、誤魔化すように答える。

湊はジッとこちらを見つめてきたが、やがて諦めたように嘆息した。

「……ま、良いわ。でも、たまには顔を見せに来なさい。お母さんも会いたがってるんだから」

「……そのうちな」

そう答えると、ようやく湊は納得したように微笑んだ。見る者を魅了させる、柔らかな笑み。他人に冷たい印象を与えがちな湊が時折見せるそれは、普段見慣れている俺ですら思わず見入ってしまう。

（……間違いなく、七夕^{なつ}さんの娘だよなあ。この笑顔は）

他人を無自覚に魅了することにかけては、天性の才能を持つ自分の保護者を思い浮かべる。

天真爛漫な母と理知的な娘とでは、性格的に似ていないと評されることの多い母娘ではあるが、この笑顔だけは間違いなく母親譲りのものである。

と、そんなやりとりを交わしていた空気をぶち壊すかのように、乱暴な雰囲気を訪れた。

店内にフルフェイスのヘルメットを被り、黒いジャケットを着た男が、サバイバルナイフを持って入って来たのだ。目的はこれ以上ない程明確だったので、俺の下す判断はただ一つ。ぶちのめす。

「おいっ！金だ——」

「す訳がないだろう！」

強盗の要求は最後まで続けられなかった。俺の鋭く殺人的な回し蹴りが、強盗の頭をヘルメットごと吹っ飛ばしたからだ。

追加で蓮土さんに任せても良かったが、さすがにそれは憚られたので、警察の事情聴取を倉田さんに任せ、俺と湊はコンビニを後にした。

「相変わらず、変な事に巻き込まれやすいわね」
「いい加減もう慣れたよ」

俺は自転車を押しながら、湊は徒歩で、夜の町を並んで歩いていた。

湊の家は俺の家からは少し離れた所にある。途中までは一緒の道なので、こうして歩いている。

それ以降、会話らしい会話は無いが、気まずい訳ではない。俺達は会話が無いから気まずくなる様な、そんな薄っぺらい関係ではない。

ふと、横をチラリと盗み見る。湊は相変わらず涼しげな顔をしている。こいつは学校ではクールそのものだが、家族や幼なじみの俺に対しては、幾分か感情を見せてくれる。信頼されている、ということだろうか。

別れ道に差し掛かると、湊は身体ごとこっちを向いた。

「それじゃ、私はこっちだから」

「ああ。今日は助かったよ。金はまた今度返す」

「別に構わないわよ。たいした額じゃないしね」

「こつこつことはきつちりしておくべきだろう?」

「……好きにしないさ」

いつも通りの、面倒見が良くせに素っ気ない幼なじみに、軽く笑みをこぼす。

「ありがとな。それじゃ、また明日」

「……っ。ま、また、明日」

何故か急に頬を赤らめ、しどろもどろに返事をする湊に疑問を抱きつつも、そのまま別れることとなり、俺は自宅へと急いだ。

コンビニから自宅に帰る途中。

俺は空腹のあまり、一刻も早く家に帰るべく、自転車を飛ばしていた。住宅街へと続く道を通ろうとしたが、目の前の信号が寸前で赤に切り替わってしまった。

何気無く自転車のブレーキを握ろうとしたその瞬間。ブチッ!と嫌な音がして、ワイヤーが千切れてしまったのだと気付いたときにはもう遅かった。

「げっ……!」

スピードはまったく落ちず、赤信号の横断歩道に飛び出した。クラクションの音がけたたましく鳴り響くが、自転車は止まらない。俺は車のライトに照らされ、黒塗りの高級車に撥ね飛ばされた。車のスピード自体は、三十キロも出てなかっただろう。ただ、超重量の車体の衝撃は凄まじく、俺の身体は宙に投げ出された。

咄嗟に空中で身を捻り、弧を描くように落下。着地と同時に膝を

折り曲げ、衝撃を緩和。我ながら見事な着地姿勢だ。念のために身体を確認したが、特に異常なし。

「だっ、大丈夫君!？」

パンパン、と服を軽く払っていると、黒塗りの高級車の後部座席から、少女が慌ただしげに降りてきた。

「ああ、お気になさらず。無傷ですから……って、お前か」

心配そうに小走りで近寄って来た少女は、俺の顔を見るなり、安堵の表情を浮かべ、溜め息を吐いた。

「なんだ、君か……。心配して損した」

「悪いな。急に自転車のブレーキがぶっ壊れて……。待て、それはどういう意味だ」

仮にも人を轢いておいて、心配して損したとは何たる言い草か。静かな怒りを含ませた問いに、少女はさも当然と言わんばかりに答える。

「だって、一般人轢いちゃったら後味悪いじゃん」

「俺も立派な一般人だっ!」

「はっ。生身で武装したテロリストと闘り合うような奴のどこが一般人なの?」

「ぐっ……! そ、それは……」

言葉に詰まる。確かにそれは事実だが、何だか腑に落ちない。それに、そもそもその大半は身に降りかかる火の粉を払っただけで、決して俺の本意ではない。

先程から失礼なこの少女は、燈ノ宮千紗ひのみや ちさといって、かの燈ノ宮家の令嬢だ。

燈ノ宮家は、その資産が世界全体の数%に及ぶとさえいわれる名家中の名家。千紗はその一人娘だ。

典雅な顔立ちであるが、弱々しい雰囲気はない。月光の下の夜会で静かに踊っているよりは、陽光を浴びながら草原を走り回っている方が似合う……そんな少女である。やや癖のある、しかし鮮やかな黄金色をした髪を、きちっと結い上げている様が、彼女の活動的な印象を強めていた。

見た目だけで言えば非の打ち所のない、世間一般で言うところの美少女に当てはまる燈ノ宮千紗は、しかしながら非常に残念な性格の持ち主であった。

とにかく横暴。自己中心的で、気分屋。気の向くままに、様々な惨事を巻き起こし、ついた渾名が『人間台風』。なまじ容姿が整っているだけに、余計質が悪い。

「おや、蘭様でしたか。お怪我は……なさそうですね」

心の中で毒づいていると、黒塗りの高級車の運転席から、初老の紳士が降りてきた。

「……ご無沙汰してます」

「こちらこそ、ご無沙汰しております。それよりも、私の不注意でした、申し訳ございません」

「いえ、俺の過失ですから」

深々と頭を下げて謝罪する男に、俺は慌ててそれを否定する。いつもの不幸とはいえ、しばらく自転車の点検を怠っていたことは紛れもない事実だ。このように謝られては、居たたまれない気持ちに

なつて仕方がない。

そうですか、と頭を上げる男の名前は、騎馬^{きは}一徹^{いつてつ}。執事服に身を固め、年齢は、髪に白いものが混じる初老。千紗の執事及び護衛を務めており、正直、かなりの手練れだ。

その威圧的な外見に反して、腰は低い。燈ノ宮家にとって、もはや部外者の俺に対してさえも、礼儀を忘れないほどだ。

「そーそー、謝ることないよ。昴君が悪いんだから」

(……こいつには本気で良心というものが存在しないんだろうか)

千紗を無視して、俺は先程から懸念していた事を確認する為、周囲をグルリと見回す。

「……あつた」

捉えた視線の先には、傷一つついた様子のない、特別製の頑丈な自転車と、その数メートル先に転がっている、中身をぶちまけた見るも無惨なコンビ二弁当の残骸。

「あーらら、酷い有り様だねえ」

肩を落とす俺の後ろからその惨状を覗き込み、実に愉しそうに笑う千紗。忌々しいことこの上ない。

「ていうかさ、なんでコンビ二弁当なの？ まさか君、いつもそんなのばっか食べてるの？」

訝しげに問いかけてくる千紗。少しは心配してくれているのだろうか。

「いや、今日は色々とあってな……。しかし、冷蔵庫も空っぽだし、どうしたものか……」

「買い直せば？」

「……財布を落としたんだ。この弁当も、湊に奢ってもらった物だったし……」

「ぷつ。だつさー！ 相変わらず君は訳分かんない不幸体質だよなー。しかもヒモときたか。堕ちたね、君も」

鼻で笑われたうえに、可哀想なモノを見る目で見られた。前言撤回、やはりこいつは俺のことなど微塵も心配していなかった。というか、そろそろ殴っても良いんじゃないだろうか。

「取り敢えず、弁当の代金を弁償致します。財布に関しては、私どもの方で探してみましよう」

「いや、そこまでしてもらう訳には……」

騎馬さんの提案を丁重に断ろうとした矢先、俺の腹の虫が盛大に鳴った。

「……では、車内に軽食が積んでありますので、それでよろしければ、召し上がられますか？」

「……お願いします」

数秒の沈黙の後、騎馬さんがそう提案してきたので、俺はその言葉に甘える事にした。騎馬さんの、劣るような視線と気遣いが、余計に俺を苦しめた。

車内から軽食を持ってきてくれるのかと思いきや、俺を自宅まで送るので、その道中に食事を済ましてくれとの騎馬さんの要望。故障した自転車についても、燈ノ宮の関係者が回収、修理をしてくれ

ること。

至れり尽くせりの待遇に頭が上がないまま、俺は黒塗りの高級車に乗り込み、千紗の隣に腰を下ろした。

騎馬さんがハンドルを握り、車は緩やかに走り出す。この車は、居住性を重視した仕様であり、後部座席には圧迫感のない十分な空間が取られていた。内装には上質な木材を使用し、窓はスモークガラス。もちろん車体は防弾仕様。加えて、流れる景色を見ないと走っているのかもわからないほど、車内には震動がほとんどない。騎馬さんのハンドルさばきは慣れたもので、運転手姿も板についている。周りの車流れに合わせながらも先へと進む動きは、熟練のものだろうか。

「……にしても、よく食べるね」

「腹が減っていたんだ、仕方ないだろう」

半ば呆れがちな口調で呟く千紗に、俺はサンドイッチなどを次々と頬張りながら返事をする。少々行儀が悪いが、空腹には勝てない。それに、隣の千紗に気を遣うつもりは微塵もない。

「その様子じゃ足りないかもね……。なんなら私と一緒にディナーでもどう？」

「いや、いい。少し物足りないが、空腹で眠れない、ということはないだろう。十分ありがたい」

「そう？残念」

千紗の誘いはせっかくだが断っておく。千紗は現在親元を離れ、この町の『比較的』小規模な別荘に住んでいるが、それでも、騎馬さんを含め使用人を大勢雇わなければ、維持できないほどに大きな屋敷だ。

そして、屋敷の使用人達の間では、俺と千紗との関係が噂されているらしい。曰く、将来を誓い合った仲だの、何らかの弱みを握り

お嬢様に交際をせまる不貞の輩だの、様々な憶測が飛び交っているそう。

そんな場所へ足を運べば、また要らぬ噂をたてられる。それに比べれば、少々空腹は我慢できる。

そつえば、と話を切り出す。

「今日はどこに行く用事があるんじゃないのか？ さっき事故った時、屋敷とは逆方向の方角に向かったみたいだが」

「ん？ 言わなかったっけ？ ちょっとパーティーに招待されたんだ」

「パーティー？ 珍しいな。確かそういうのは嫌いだっただろう、お前」

何と言っても天下の燈ノ宮のご令嬢。どうにかして取り入ろうと言いつてくる連中があとを絶たないため、千紗はパーティーなどの家の関係での用事を毛嫌いしていた筈だ。

「んー、まあそんなんだけどね。パーティーの主催者が私の幼なじみだからさ、断るに断れなくて」

まいったまいった、と頬をぼりぼり掻く千紗。気のせいかな、どこか嬉しそうだ。

「誰だ？」

「姫っち」

「ああ……。随分と久しい名だな。相変わらず小さいのか？ あいつ」

「うん。小学生にしか見えない」

「お前も年上には見えないがな」

「あはは、殴るよ？」

につこりと笑顔で拳を振るってくる千紗をヒョイとかわす。そう、これでもこいつは一つ年上だ。傍若無人で子供っぽい性格から、ついつい忘れそうになる。

「……というか、さっき言ってたディナーってパーティーのことか？」

「うん。姫っちも昴君に会いたがってるだろうなーって思ったからでもま、どっちにしる嫌でしょ？」

「まあな」

姫に会いたくない訳じゃない。かれこれ四年は会っていないし、久々に顔を見たいとも思っている。しかし、そこで晒される好奇の視線にはどうしても堪えがたい。

蘭家の末裔。

災厄の遺児。

悲劇の象徴。

そんな蔑みを受けてまで行こうとは思わない。吹っ切ったつもりでも、傷は完全に癒えていない。

今は、まだ。

「九年も前のこと、覚えてる人なんてごく少数だと思うけどね……」

「だといいがな。まあ、また今度の機会にしておく」

「はいはい」と

そこまで話したところで、会話は途切れた。車は俺達を乗せて、静かに自宅へと走っていった。

それから数分後、車は自宅に到着し、そのまま千紗と別れる。俺は千紗を乗せた黒塗りの高級車を見送り、自宅へと入って行った。一人で住むにはあまりに広すぎる、思い出の染み付いた我が家へと。

「ただいま」

当然、返事はない。いつもの事だ。そこに寂しさを覚えることはない。

「ふう……」

リビングに入り、一息つく。財布は明日にでも警察に届け出ようか、と考えながら、テレビをつけると、ちょうどニュースがやっていた。

政治に関するニュースの後、ホームレスばかりを狙って暴行を加え、所持金を奪うという強盗を働いていた通り魔が、ようやく逮捕されたというニュースが流れた。

犯人は十代前半の少年たち。罪の意識は皆無のようで、「汚くて目障り」という理由で襲っていたらしい。「これは教育制度の弊害であり、すぐに改革するべき」と語る政治家と、「型破りの思想は若さの可能性。それを潰すべきではない」と反論する別の政治家の議論がなされており、「うちの息子も社会の被害者」という少年たちの母親のコメントが中継で流れ、最後には「多様な価値観があるのが現代社会の特徴」というニュースキャスターのコメントで締め括られていた。

俺には社会的弱者を襲うという愚行はまったく理解できないが、それを今にも許容しかねない社会のあり方も、やはり理解できないか

った。

「……世も末だな」

凶悪犯罪が増加する中、日本はそれでも世界的に見れば平和な国家となされているのだ。いつになろうが、どこに居ようが、人の悪意が尽きることはない。

風呂にでも入ろうか、と立ち上がったその時、インターホンが鳴り響いた。備え付けのカメラを確認すると、そこには先程別れた筈のチルハが居た。

「……チルハ？ どうしたんだ一体？」

取り敢えず玄関へと向かう。靴を履き、外に出る。庭を横切り、門に歩いていくと、チルハがこちらに気付いた。

「あ、すーちゃん！」

「何か用か？」

少し嬉しげなチルハは、先程の巫女装束ではなく、質素な浅葱色の着物の着流しで、上品な紺色の帯を後ろで結んでいる。髪飾とも合わさって、全体的に青系統の色で統一している。

巫女装束も似合っているが、こちらの普段着の方がチルハにはしっくりくる。

「えと、あのね。落とし物を届けに来たんよ」

「落とし物？」

そう言っただけでチルハが懐からごそごと取り出したのは、見覚えのある革財布。俺が一時間程前に落としたとおぼしき財布だった。

「俺の財布……。これをどこで？」

「それは、その……」

何故か言いづらそうに口ごもるチルハ。頭に疑問符を浮かべながら見つめていると、不意に背後から首筋に息を吹きかけられた。

「んなあぁっ!？」

びくう！と勢いよく振り返ると、そこには悪戯が成功して喜ぶ子供のように、意地の悪い笑みを浮かべた、銀髪の女性が立っていた。

「くっく。よい反応だね」

まるで月光を紡いだかのような銀系の髪は頭頂部で一つにくぐられただけで、あとは背中からくるぶしまで流されている。それなのに、瞳の色は太陽のような金色。

白皙の肌の中で唇はいっそう紅く見える。光沢のある漆黒の着物に赤い帯を花魁のように前で結び小首をかしげるその姿は、確かに美しい。

だが俺は、本能で悟っていた。

この女、絶対に性格悪い。

「まあ、そう警戒せんでもよかつ。別にとって食ったりはせん」「するに決まっているだろう。……誰だお前は？ どうやってそこに現れた」

害意こそ無いものの、この女、全く気配を感じなかった。まるで突然そこに浮かび上がったかのように、唐突に現れたのだ。警戒しないわけがない。

「かなえ様……」

チルハがポツリと銀髪女の名を呟く。その視線には困惑の色が混じっている。

「……知り合いなのか？」

「あ、うん。その……」

「妾はかなえ。散葉の憑き神であり、叶絵の地の神じゃ」

「……は？」

あまりに突拍子のない話に思わず間の抜けた声が出る。
待て。この女、今なんて言った？憑き神？叶絵の地の神？

「……本当か？」

チルハに確認をとると、こくりと頷く。それから再び、後ろに立つかなえに向き直った。

改めて観察してみる。どこか神々しさを持つ、艶やかな女。留美奈に巻き込まれて経験した厄介事の中で何回か遭遇した、人ならざる者特有の雰囲気纏う存在。

「……なるほど。土地神に会うのは初めてだな」

「ふむ。あまり驚かないのだな」

「別に神の存在を疑ったことはないさ。何せ俺の不幸は奴が俺を毛嫌いしてるせいだからな」

「くつく。なるほどのう。確かに、随分と運に恵まれておらぬよう

だのう」

さもおかしそうに笑った後、かなえは品定めするように顔をズイツと近付け、俺の顔を見つめる。すると、ピクリと眉をひそめ、黙り込んでしまった。

「……？」

不審に思い声をかけようとした、その時。世界が凍りついた。

俺とかなえだけを取り残し、時が止まる。隣に立つチルハさえも、まばたき一つせずに、その場から動かない。

「……随分と強大な土地神らしいな」

まさか、たかが土地神に時を止めるような芸当ができるとは思わなかった。かなえは、少々特別な神なのかもしれない。

「妾の力が及ぶのはこの叶絵の地でのみだかの。この娘に力を貸してやれるのも、この地限定」

「……憑き神、と言ったな。どういうものなんだ？」

「散葉の家系、つまり如月家は、代々神憑きの家系での。数代に一人、妾が憑坐よりましとするに相応しい者が現れる。その者が十四となった時、契約を結ぶ」

「要は守り神のようなものか……。それは、如月家が代々お前を祀っているからか？」

「うむ。……まあ、盟約、といったところかのう」

「盟約？」

「如月葉^{きげんぎよう}。如月家の初代当主との約束だの。そして、妾に相応しいと認められた者には、葉とおなじ『葉』の一字がつけられる。散葉のように」

「……ふむ。兄弟か、あるいは親子で複数、相応しい者が現れることはないのか？」

「稀にある。その時は、より力の強い方に妾が憑くことになっておる。この子の母親も、織葉^{オルハ}といつての。強大な力の持ち主であったよ」

「……ということは、チルハの方が力が強いのか？」

「うむ。まあ、契約のせいで叶絵の地以外では、織葉と大差はないが」

「どういうことだ？」

かなえの話では、十四の時に適合者と契約し、契約者の身体の一部を楔として使うのだそうだ。その身体の一部が強固なものであればあるほど、かなえとの結びつきが強くなり、より力を引き出せるらしい。

「この子が差し出したのは、髪の毛。巫女にとって、髪を切るとは霊力をおとすと言われている。その霊力が戻らぬ代わりに、妾の力を貸し与えて力を発揮するのだの」

「……つまり、お前の力が及ばない所では、並の霊能者と同程度の力しか発揮できないのか？」

「いや。言っただであらう？ 織葉もまた、神憑きの適合者。霊力をおとして尚、その織葉と同程度の力を有しておる。散葉は、それだけの才能を秘めた者ということだの。この叶絵の地において、散葉に敵う者などお主か、墜月の家の者ぐらいかのう」

まさかここで墜月の名が出てくるとは思わなかった。いや、しか

し留美奈や師匠ならば、神だろうが何だろうが笑いながら蹴散らさ
だろう。

「……そう言えば、師匠から聞いたことがあったな。銀髪の悪女が
叶絵町にはいると」

「……銀蔵め。相変わらずほんに無礼な奴だのう」

やはり、知り合いか。あの師匠は本当になんでもアリだ。

「ところで、俺の財布を拾ったのはお前か？」

「うむ。叶絵の地は妾の庭だからのう。暇潰しに観察しておったら、
転んで財布を落としてヤクザに絡まれておる哀れな少年を見つけた
もののう。……まあ、返り討ちだったがのう」

つまり、人の不幸を暇潰しに見ていたと。どうして俺の周りには
こう性格の悪い奴ばかりいるのだろうか。これも一つの不幸か。

「……まあ、財布を拾ってくれたことには感謝する。……で、そろ
そろ本題に入ろうか。わざわざ時間を止めてまで俺と話したいこと
があるんだろう？ チルハには聞かせたくないことが」

うむ、と頷いてから、かなえは本題を切り出す。

「お主の不幸について」

ぴくん、と俺の肩が揺れる。

「くつく。目の色が変わったのう。……さて、お主の運が悪いのは
周知の事実だがのう、その不運が周囲をも巻き込んでおることは自
覚しているかの？」

「っ……！」

自覚しない訳がない。そのせいで、両親や姉は、亡くなってしまったのだから。

小学校の時の修学旅行中も、バスジャックとハイジャックと、シージャックにあった。結局、全部俺が解決したので、同級生達はいい思い出が出来たと笑っていたが……ただ一人だけ、俺を『疫病神』と罵った奴がいた。

そいつは最初からクラスで孤立していたが、その事がキツカケで、完全に浮いてしまった。直接苛める奴は、俺のクラスメートにはいなかったが、そいつは最後に、俺にしか聞き取れない罵声を浴びせて、転校していった。そいつから見れば、確かに俺は『疫病神』だったのだろう。

「……その顔は、自覚しとるようだよ」

かなえはそう言って、話を続けた。

「昂。お主、相当義理堅い性格をしておるのう。運勢もそれに比例して、義理堅いものとなっておるのう」

「……どういふことだ？」

「つまりは、周りに不幸をばら蒔いた分、今度は幸をばら蒔いておる。このままでは、昂の運は無くなってしまうだろうのう」

「無くなるとどうなる？」

「……幸も不幸もない、平坦な人生を送ることになるだろうのう」

良いことも悪いことも、何一つ起こらず、ただ生きるのみ。平和には違いないだろうが、退屈極まりない。

「……どうにかできないのか？」

「できなくはない」
「本当かつ!？」

身を乗り出した俺に、かなえはニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる。

「ただし、条件がある」
「……なんだ？」

警戒しながら訊ねる。どんな無理難題を吹っ掛けられるか分からない。そんな俺の警戒を知ってか知らずか、かなえはフツと微笑み、腕をユラリと上げる。俺の警戒心が高まる中、かなえは指先をピンと伸ばし、俺の隣を指差した。

「この子に何かあった時は、護ってやっておくれ」

その指差した先には、時が止められたまま動かないチルハ。

(……どうということだ?)

かなえ自身が守った方が確実だろう。神なのだから。そんな俺の疑念を察したのか、かなえは言葉を続ける。

「妾は力を貸すことはできるが、この子の為に力を振るうことはできぬ。そして、この子はまだ幼い。だから、護っておくれ。この子を」

かなえにも事情があるのだろう。盟約とやらのせいで、あまり人に手出しはできないのかも知れない。

……しかし。

「そんなことで良いのか？」

「そんなこと、とな？」

「言われずとも、チルハに何かあった時は、俺が全力で護り抜くさ」

かなえがポカンとした表情で驚く。それから、再びくつく、と笑いながら何かを呟いた。

「（……なるほど。散葉が惚れるのも頷けるというもののだの）」

「何だ？」

「くつく。何も。それはそうと、お主の不幸をどうにかする方法だ
がの」

「ああ」

「それは——……」

）
）

「……あれ？」

かなえがパチン、と指を鳴らすと、世界が再び時を進め出した。
それと同時に、散葉がぱちくりと瞬きをする。

「何かの？ 散葉」

「あ、ううん。多分気のせいやから……」

しれっとした顔で訊ねるかなえに、しきりに首を傾げながらも無理矢理自分を納得させたように否定するチルハ。

かなえ曰く、チルハもかなえとの契約によって神通力を扱えるた

め、たとえ時が止まった事を認識できなくても、その残滓を感じ取る事ができるのだそうだ。

だからこそ、最大限隠蔽を施してから術を解いたのだが……チルハが天才である、というのは真実のようだ。疑っていたわけではないが、普段の天然娘からは想像もつかない。

「さて、目的は果たしたし、帰るとするかの」

「あ、うん……！　そうやね。じゃあね、すーちゃん！」

「またの、昂」

「ああ、またな」

二人に別れを告げ、俺は家の中に入っていった。パタン、と玄関の扉を閉め、ため息を吐く。

「結婚か……」

かなえが提示した、運勢を変える方法。それは、伴侶を見つけろ、という突拍子のないものだった。そもそも、現時点で結婚は不可能だ。俺はまだ結婚できる年齢に至っていないし、そもそも相手がない。

『結婚とは相手と運勢を共有する事。夫婦は運命共同体というしの昂、お主旦那が不運で女房が幸運なんて話、聞いた事あるかの？』

確かに聞いたことがない。しかし、その逆もまた然りではないだろうか？

要するに、俺が不幸なら相手も不幸になってしまうのではないか、という俺の懸念に対しかなえは、言い忘れておった、と前置きをし

て、

『人の一生に幸と不幸は均等に存在する。お主の場合、不幸が先に集中しておるのだのう。結婚する頃には、そろそろ不幸も尽きる』

これは朗報だった。自らの幸運が他人に作用する体質さえどうにかすれば、薔薇色の人生が待っているということだ。

『お主の幸は身近な者に特に作用する。結婚すればその幸は女房にほとんど行き、運勢を共有している昴にも作用するという訳だのう。学生のお主に結婚は難しいと思うが、おなごと付き合うだけで同じ様な事が起こるぞ。効果はずっと弱いがのう……』

要は簡易版といった所か。しかし、付き合うにしても、かなり厳しいものがある。前述した通り、俺はかなりの悪人顔だ。俺と付き合うような奇特な人間なんて、そうそう居るはずがない。

「……前途多難だな」

そう呟いて、俺は頭をガシガシと掻きながら、自室へと戻った。

自室に戻る途中、思う。

俺なんかを好きでいてくれる人がいるとしたら。

その人を、俺のせいで苦しめることがなくなるのだとしたら。

俺は、今度こそ、誰かの傍に居ることができるのだろうか。

こんな、俺が。

「……くだらない、な」

くだらない。ああ、くだらない。

そんなこと、ある筈がないのに。

だから俺は、一人でいい。

これまでも、これからも。ずっとずっと、一人きりで生きていくのだ。

たった、一人で。

序章 不幸な少年のお話 - The God of Death - (後書き)

読者の皆様、初めまして。

痛い設定満載の本作品の作者である八百奈です。

実は、ラブコメにしようかアクションにしようか迷ってます。ぐだぐだです。

取り敢えず両方頑張ってみます。

気長に更新をお待ち下さい。あと、お気に入り登録して頂けると幸いです。

ちなみに八百奈は主人公最強設定大好きです。作品にも顕著に現れます。

2010年10月25日改訂

第一章 腹黒女神・The Scheming Goddess・

ぴんぽんぴんぽんぴんぽん。

返事を待つ間もなく連続して、自宅のインターホンが鳴り響いた。眠りの世界へと誘われていた頭を奮い起こし、ベッドの脇のテーブルの上の時計を仰ぎ見る。時計の針の指す数字は五時ジャスト。無論午前の。

まさか訪問販売や引越しの挨拶がこんな時間に来る筈もあるまい。留美奈は非常識ではあるが、朝が弱いため選択肢からは外れる。湊やチルハ、あるいは師匠や七夕さんもあり得ないだろう。昨日知り合ったかなえの場合、インターホンなど押さずに部屋に侵入しかない。

となると、今も現在進行形で、二つある内の玄関に備え付けられているインターホンを鳴らし続けている人物はただ一人に限られる。

自室にあるインターホンの子機を手に取り、画面を忌々しげに見つめると、栗毛を揺らしながらインターホンをひたすらプッシュし続ける千紗の姿が写っていた。

このまま無視し続けても良いのだが、喧しいし、第一どんな荒業を使って家の中に入ってくるか分からない。

「……はあ。仕方がない」

溜め息を吐きながら、普段着に着替える。その間もインターホンは鳴り続ける。気のせいかな段々と軽快にリズムを刻み始めた。子機で応答しても良いのだが、非常に苛つく発言を一方的に浴びせかけられそうなので、直接対峙した方がマシだ。

着替え終え、階段を下りて玄関に向かう。ガチャリと鍵を開け、音を立てて開いた扉の前に立っていた千紗は、はにかむように呟い

た。

「……きちゃった」

思わず扉を閉めて鍵をかけた俺の判断は間違っていないだろう。というか一瞬鳥肌が立った。途端に頑丈な扉がドンドンと勢いよく叩かれる。痛くないのだろうか？

「ちよっ！ 選択肢間違えちゃってるよ昴君！ 美少女が朝からはにかんで「きちゃった……」とか呟いてるんだから君は満面の笑みで迎えるべきなのに！ せっかくの千紗ぽんフラグを叩き折るつもり！？ いったいいつからフラグメーカーからフラグクラッシャーに転職しちゃったのさ！ ていうかさっさと開、け、ろ——！！」

「……お前のフラグは九割が俺にとつての不幸フラグだよ」

歓迎したくなどないが、近所迷惑になるので仕方なく扉を開ける。再び見えた千紗の表情は、ひどく不満気だった。

「まったく、失礼にも程があるよ君は！」

「お前がこんな早朝から訪ねてくるのが悪いんだろ。何の用だ？ 第一騎馬さんか柊ついではどうした？」

「抜け出して来たに決まってるじゃん。バカなの君？ あ、ミウっちは昨日から熱出して寝込んでるよ」

「熱？ 大丈夫なのか？」

苛つく発言はいつものごとくスルーし、要点だけを聞き出す。そう言えば昨日も居なかったが、そのせいかな。

「だいじょぶじゃない？ あの子身体は丈夫だし」

「それもそうか……。まあ、養生するよう伝えておいてくれ」

「うい。という訳でお邪魔しまーす！」
「……勝手にしろ」

半ば諦め、千紗を家に招き入れる。余計な事をされる前に客間に押し込み、台所で二人前のコーヒーとサンドイッチ、スクランブルエッグを用意する。

「そら、どうせ朝食もまだだろう？」
「やたっ！ 流石昴君、気が利くね」

嬉々としてサンドイッチを頬張る千紗。材料は、昨日結局空腹になったので、スーパーで買ってきたものだ。まあ、昨日の礼のようなものだ。空腹の俺をもてなしてくれたのは騎馬さんだが。

「……で、こんな朝早くから何の用だ？」
「むぐ……んんっ。家出？」

口に含んでいたサンドイッチを飲み込み、こくりと小首を傾げる千紗。その答えに俺は、またかと呆れる。

「またとは失礼な！ それじゃ私が家出を度々繰り返してるみたいじゃん！」

「事実そうだろう。これで二十回目だぞ」

千紗には家出癖がある。俺が高校に入ると同時にこの家に戻ってから二年間というものの、事ある毎に千紗は我が家へと押しかけてくる。しかも理由の大半が自業自得だ。

「……で？ 今回はどうして家出なんてしたんだ？」
「よくぞ聞いてくれましたっ！」

堰^{せき}を切ったような勢いで話し出した内容を簡潔に纏めると、騎馬さんが縁談の話を持ちかけてくるのに嫌気がさし、家出てきた、ということらしい。

「という訳で、匿^{かく}つてよ。許嫁なんだから」

「『元』だろう。いい加減上に立つ人間の義務だと思って諦^{あきら}めろ」

幼い頃、親同士が勝手に決めた話。現在蘭家はあつて無いような状態だし、許嫁の話も自然消滅した。

許嫁の関係が続いていれば、縁談の話はそもそも存在しなかっただろうし、俺にも責任の一端はあるのだろうが、知ったことではない。

他人の家に介入するのはタブーとされているし、代々続く燈ノ宮の家系が守ってきた歴史や役割を貶^{おとし}すことにもなる。俺は最早部外者なのだから。

「冷たい！ マイナス三百度ぐらい冷たいよ君は！」

有り得ない程冷たいと暗に言っているのか、単に間違えているのか。おそらく後者だろう。絶対零度よりも温度が低い。

「断^{ことわ}ることも可能なんだろう？ 適当にやり過^{すご}せば良いじゃないか」

「嫌だよ！ 何が楽しくて春休みにオッサンと堅苦しい雰囲気で見合いなんかしなきゃなんないのさ！」

「……で、逃げてきたのか。どのあたりまで話は進んでいるんだ？」

縁談の話を持ちかけられただけならこうして俺の家に逃げ込んでいてもなんとか許されるだろうが、既に縁談が具体的にセッティン

グされている段階まで来ているのなら、千紗を連行しなければなら
ない。

「まだ、騎馬が縁談の相手のプロフィールを大量に運んできただけ」
「なるほど……」

基本的に千紗の教育係は騎馬さんに任せられているのは知っていたが、まさか縁談の相手まで決められる筈もない。騎馬さんの行動を訝しるが、取り敢えず放置しておこう。

「事情は分かった」

「じゃあ匿って——」

「帰れ」

「なんでさ!？」

「邪魔だ」

切実に。

俺の有無を言わせぬ返答に、ソファにひっしとしがみついて徹底
抗戦の意思を表明する千紗。

「やらせはせん! やらせはせんぞおおおおお痛い!」
「喧しい」

喚く千紗を拳で黙らせる。無論、きちんと手加減はしてある。し
かし、相当痛かったようだ。涙目になって上目遣いで抗議してくる
千紗。

「ううう。酷いよ昂君……っ」

「悪い、手が滑った」

「嘘にも程があるよ!」

これ以上喚かれても煩わしいので、仕方なくこの駄々っ子を家に置いておくことにした。騎馬さんは既に事態を把握しているだろうが、念のため後で連絡して、頃合いを見て引き取ってもらおう。

そう心に決めてから、少し冷めてしまった朝食を摂ることにした。

）
）

「……………どうしてこうなった？」

目の前に広がる光景を見て、思わず呟く。傍らには千紗。顔を伏せながら頬を赤らめ、身をくねらせるといふ演技をし、正面に立つ相手を挑発し続けている。もう一方は、無表情で怒りながら、何故か俺に凍てつく視線を浴びせてくる幼馴染み。

「昨日は激しかったよね。昂君ってばあんなに勢いよく（車に）ぶつかってきてさー。もう（車が）壊れちゃうかと思ったよ」

「へえ……。随分とお楽しみだったのね。こんなことをする為に一人暮らししてたのかしら、昂」

千紗は昨日の事故の話をしているのだろうが、湊はそれをあらぬ方向に勘違いしているらしい。間違はなく千紗の確信犯なのだ。

こんな朝早くから異性が家にいれば、昨晚から居て、良からぬ行為に及んでいたと誤解してもおかしくはないのだろうが、俺と千紗の関係をもう一度よく考え直してみないか湊？

俺と千紗が恋仲にあるなんて愉快的勘違い、天地がひっくり返っても不可能だと思うんだが。

しかし、余程取り乱しているのか、俺のそんな説明に全く取り合

わない様子の湊。そしてからかい続ける千紗。加速する険悪な雰囲気。俺は嘆くように、祈るように呟く。

「……誰かなんとかしてくれ」

そもそも何故、朝っぱらからこんな修羅場が展開されているのだろうか。ふと、回想に耽ってみた。現実逃避とも言っ。

いつもよりかなり早めの朝食を摂り終えた俺は、家出娘に勉強を教えていた。理由は簡単、この阿呆が留年したからである。

「やだよタルいよ遊ぼうよー！」

「黙れ。たかが高等教育ごときでつまづく阿呆にそんな余裕はない」
「全国の劣等生を敵に回す発言だねそれ」

千紗の両親が日本に居ることは滅多になく、昔から千紗は放任主義の元に育てられてきた。教育係として騎馬さんが居たが、千紗の筋金入りの勉強嫌いには流石の騎馬さんも対処しきれなかったらしい。

千紗の父親が、女性に学は必要ない、という古い考えの持ち主であるのもそれを助長させる要因の一つであった。

「全く……。俺と同じかそれ以上の英才教育を受けておいて、全く実を結ばないとはどういう見だ？」

「昴君と同じ学年になりたかったんだよ」

イラッ。

「また殴りたいのか……？」

「ごめんなさい調子に乗りました。でも昴君と同じ学年になれて嬉しいのはホントです」

……こういう事を恥ずかしげもなくのたまうから、余計対処に困る。

何はともあれ、このままでは本当に不味いので、この機会に三年の復習をさせておく。

「……良いからやるぞ。参考書なら丁度良いのを用意してある」

「うえー……嘘ですごめんなさい。きゃほーい！ 昴せんせーの個人授業だー！ ……あれ？ よく考えたらかなりのレアイベント？ 流石私、いつの間にかフラグ立ててたよ」

頭が痛くなるのを無理矢理抑え込み、無心で千紗に勉強を教えこんでいた。

勉強を教え始めて数時間。千紗の集中力も途切れがちになってきた。

もともと千紗は何か一つのことに集中するというのが昔から苦手なのだ。そのくせ、訳のわからない方向にばかり無駄に高いスペックを発揮するという、傍迷惑な性質を持つ。

「ふああっ……！ もう無理だよ、昴君……。これ以上は（頭に）入らないよ……」

「まだ大丈夫だろう、我慢しろ」

「やり過ぎは駄目だってばあ………！」

「む……。それもそうか。それじゃ、仕上げといくか」

「うん……きて」

何故か勉強の間ずっと、艶のある色っぽい声を出す千紗に対して——最早突っ込む事すら億劫なので放置したまま——勉強を自室で教えていた。

何がしたいのかは全く分からないが、まだ余裕はありそうなので休憩を終えたらまた勉強を再開しよう、と本人が聞いたら卒倒しそうな思考を巡らせていると、突然部屋の扉が大きな音を立てて開かれた。

何事かとそちらへ振り向くと、凍りつくような笑みを浮かべた魔王が立っていた。

「み……湊？　いつ入ってきたんだ……？」

「ついさっきよ。インターホンを押したのだけれど、反応がなかったから入ってみれば……何をしているのかしら？」

おかしい。インターホンが鳴れば自室の子機で気づく筈……。そこまで思い至ってから、まさかと思いつつも子機へ視線を向けると、それはバッテリーを抜かれた状態でうつ伏せに鎮座していた。

「……千紗？」

「だって……せっかくの昴君の個人授業を邪魔されなくなかったんだもん」

もじもじと俯きながら、兩人差し指を突き合わせつつ頬を赤らめるといふ、千紗らしからぬ乙女チックなしぐさに対し、誰だお前は、と突っ込むとするよりも前に。

ピシリ、と何かが凍りつく音がした。

湊は先ほどの凍りつくような笑みを一変させ、無表情へとカタチを変えた。

まずい。本格的にキレル予兆だ。背後にいる千紗の、愉しそうだと言わんばかりの気配に冷や汗をかく。

この状況でこれ以上千紗に何か言われたら、最早俺の手には負えなくなる。

目の前にいる魔王は、視線を緩やかに俺へと移す。なるほど、矛先は俺なのか。理不尽だなあオイ。

「個人授業……。楽しそうな響きね。一体何を教えていたのかしら？」

「勉強以外ある筈がないだろう？ 取り立ててやましいことは何も無いぞ」

「なら、そもそもどうしてこんな時間に彼女が居るのかしら？」

「いや、それはだな――」

有無を言わせぬ静かな問い。決して声は大きくないのに、部屋の中にハッキリと響く。

俺に非は一切ない筈なのだが、この状態の湊にはどうしても強気に出れない。

まるで本能に刷り込まれているかのように、逆らってはいけないと脳内で警笛が鳴り響くのだ。

故に、この状況を愉しんでいられる後ろの阿呆は、頭のネジがごっつそりと抜け落ちた、命知らずの大馬鹿野郎か、あるいは自殺願望者なのだろう。

その大馬鹿野郎は、空気を読んだ上で、事態を最悪の方向へと導く悪魔の台詞を朗らかに告げる。

「そう言えば昴君、昨日はとっても激しかったよね」

ああ、こいつ。何でそんなに余裕をかましていられるのか不思議で仕方なかったが、矛先を俺に誘導したうえで火に油を注ぐ方法を熟知してやがるからか。

千紗への復讐方法を思い巡らせながら、目の前の爆発寸前の魔王を、なるべく刺激しないように宥めすかせようと、重い重い一步を踏み出すのだった。

以上、回想終了。

）
）

その後、なんとか湊を宥めて事態を収拾したものの、湊の機嫌は直らない。原因は言うまでもなく千紗。

どうも千紗と湊は、徹底的に馬が合わないらしく、会う度に嫌味の応酬を繰り返している。

だからと言って俺まで巻き込まないで欲しい。以前そう苦言を呈したら、二人一緒に溜め息を吐かれた。訳が分からない。

「……で、湊はどうしたんだ？　こんな朝早くに」

千紗に勉強を教えていたのは二時間弱。今は八時を少し過ぎた辺りである。

湊は時々食事を作りに来てくれたりするが、取り立てて用もなく来ることはない。

未だ棒立ちのまま不機嫌な湊は、椅子に跨がる千紗と睨み合い、火花を散らしていたが、渋々視線を外し俺に向き直る。

「これ、お母さんがおすそ分けにつて」

そう言つて眼前に掲げたのは、先程は魔王化していた為気付かなかった小ぶりの鍋。それから漂う懐かしくも芳しい香りは――。

「煮物か」

「ええ。うっかり作りすぎたらしくて」

「……まあ、そういうことにしておこう」

――本当に、あの人は。

七夕さんはうっかりが多いが、料理に関してはスペシャリスト。あらゆる意味で失敗はあり得ない。

……つまり、これはあの人なりの優しさ。七年間も育ててもらつておきながら、勝手な理由で出ていった俺を、心配してくれているのだ。

未だにこんな俺を、息子同然に愛してくれている。おそらく一生、あの人には頭が上がらないだろう。

「で、ルンルン気分でお使いに来たんだ、みなっちは」

「勝手に人を躁扱^{そく}いしないでもらえる？ あと変な渾名を付けないで」

再び始まるいがみ合い。魔王 VS 人間台風。そんな災害級が存在を俺に止められる筈もなく。

「どうして二人とも仲良くできないんだ……？」

そう呟いた途端。二人の矛先が自分へと移つたことを本能的に理解した。

……なんでだよ。

「それを君が言うんだ。へー、ふうーん」

「……もげれば良いのに」

「……ボソツと怖いこと言うなよ」

何がとは聞けなかった。取り敢えず煮物を受け取り、その場から逃げた。

閑話休題。

「……なるほどね。要はまた昴に迷惑をかけてるの、貴女は」

「仕方ないじゃん、昴君しか頼れる人が居ないんだから」

事情を把握した湊が呆れがちにため息を吐き、千紗があっけらかんと言り返す。

千紗の交友関係は広くもあり、狭くもある。それには千紗の家柄が大きく関係してくる。

燈ノ宮家の子女としての関わりは世界中に及ぶほど存在するが、千紗個人の友人は、驚くほど少ない。

その大部分が燈ノ宮学園の生徒であり、その中でも特別親しいのは、柊を除いては、俺や湊や留美奈やチルハといった、生徒会のメンバーのみ。

それほどまでに、燈ノ宮家というのは大きな存在なのだ。千紗が燈ノ宮家を疎ましく思う気持ちも分からなくはない。

上辺しか見ない連中になど頼れる筈もなく、一般家庭の友人に迷惑をかける訳にもいかず。

そうして必然的に選ばれたのが俺。

気心が知れており、かつ迷惑のかからない（と本人は本気で思っている）俺ならば大丈夫だと、千紗は判断したのだろう。

無条件に寄せられている信頼は、もちろん嬉しくはある。
が、だからと言って甘やかす訳もなく。

「さて、勉強の続きでもするか」

「うあ！？ 終わりじゃなかったの！？」

「あら、楽しそうね。私も手伝うわ」

「魔王二人の個人レッスン！ あ、死んだな私」

失敬な。誰が魔王か。

それよりも、先ほどの礼をたつぷりとしなければならないな。く
くつ……。

千紗の悲痛な声を意図的に無視して、俺と湊による千紗の個人授業は昼まで続けられた。

くく

千紗の勉強が一段落着いた頃。今日の昼食は何にしようか、煮物は夕食時に食べる予定だしな、と思案する。

「昼食、何が良い？」

「……ゴルゴンゾーラのリゾットとデザートに柚子シャーベット」

「何でも良いわ」

取り敢えずリクエストを聞いてみると、勉強という名の拷問から解放されて、机に突つ伏す千紗からは、空っぽの冷蔵庫に昨晚買い足した程度の食材では到底作り得ないうえに、時間的にかなり厳しい要望が、どうでも良さげな湊からは、主婦が夕飯のメニューを決める際、最も困るとされる返答が返ってきた。

どうしたものか、と頭を捻らせていると、傍らに鎮座していたインターホンの子機が鳴り響いた。

今日は千客万来だな、と一人ごち、子機を手取る。

そこに映し出されていたのは、祖父譲りの日本人離れ、どこか人間離れた印象を受ける、鋭い輝きを放つ銀髪と、母親譲りのダークブラウンの瞳を持つ少年。

飄々とした雰囲気をつた、神出鬼没という言葉が似合う少年が、こちらを画面越しに覗き込んだ途端、親の仇の様に睨んできた。

『……リア充もげろ』

『……なんだ藪から棒に』

『朝からずっと美少女二人も侍らせるようなイケメンなんて滅んでしまえ!』

侍らせていないし片方はお前の姉だし最後のはなんだ皮肉がこの野郎。

『……何か用か? 留美奈』

湊の双子の弟であり、少々奇行の目立つ、学園では変人を通っている幼馴染み。

一番最近では確か……去年のクリスマスにどす黒いサンタ服を着込んだかと思うと、「ちよつとカップル殺してくる」などと宣って聖夜の街に繰り出したり、その翌日謎のテロリスト団体によるラブホテル連続爆破倒壊事件を満足げに眺めていたな。

リア充撲滅運動、だったか。傍迷惑な。

ちなみに職業は『魔法使い』兼学生。今もインターホンのカメラを媒介に、遠見の魔術でも行使して此方の様子を覗いているのだろ

う。

留美奈には色々世話になっている。

この毎週強盗が侵入を試みるという物騒極まりない我が家に、悪意を持った者には認識できないという指向性を持った結界を張ってもらったり、魔術結社とかいう訳の分からない集団に目を付けられた際にそれを潰す手伝いをしてもらったり——そもそも原因の発端は留美奈にあったのだが——など、昔から深い付き合いをしている。いわゆる腐れ縁、という奴だ。

『お袋様に昼食にご招待するから呼んでこいって言われたのですよ。という訳でその家出娘及び我が姉と一緒に連行したまえよこのリア充が』

「だが断る！」

「勝手に断るな阿呆。というか誰がリア充だ誰が」

「そもそも何故私が出中だとバレたし」

「素行の悪さが原因じゃない？」

「なにをー！」

嗚呼、何故この三人が絡むとカオスな空間が展開されるのだろうか。

ソリの合わない千紗と湊の組み合わせも然る事ながら、悪ノリの激しい、ほぼ理解不能のネタ会話を繰り返る千紗と留美奈の組み合わせも大きな要因を占めるだろう。最近無自覚に毒されてきた感が否めない。

微妙にへこんだものの、七夕さんがわざわざ留美奈を寄越してまで、昼食に招待してくれるのだから、昨日の様に拒否したりはしない。

断ればきつと、あの人は目に見える位しょんぼりと悲しんで、それでも笑顔を取り繕おうとしてしまうだろうから。

それに、七夕さんの料理は尋常じゃない程に美味しいのだ。長年食べ続けてきた舌が知っている。お袋の味、というものは生憎ともう思い出すことが出来ないが、墜月家での食事、それを忘れることはない。

「分かった、すぐに行く」

『うん、むしろ連れて行く』

留美奈の言葉と共に、突如自室が眩い光に覆われ、幾何学模様の光り輝く魔方陣が足元を包み込み。

光が収まった頃には、俺達は部屋から跡形も無く消え失せていた。

）
）

「はい到着ーっ！」

「……何の前触れもなくいきなり何をする。というかあんな転移陣いつの間に部屋に仕掛けたんだお前は」

「この方が楽でしょ？　ちなみに転移陣はこないだちよろつと」

過剰な演出を含んだ転移陣——本来あそこまで発光しない筈だが、留美奈のよく分からない拘りによるものだろう——を潜り抜けて辿り着いたのは、墜月家の屋敷の真正面。大きめの武家屋敷調伝統家屋が、目の前に広がっていた。

「はー……いつ見ても古風というか厳めしいというか」

「実際古いしねー」

千紗の溜め息混じりの感嘆に、留美奈が事も無げに返す。

墜月家は、都心から少し離れた住宅地の一角を占める古めかしい日本屋敷だ。戦前に建てられたそれはとても頑丈な作りで、関東大震災の際にも――そもそも師匠の結界のおかげで地震の揺れとは無縁のものであったのだが――一切被害は無かったほどだという。広い敷地を囲む高い塀、そして立派な門構えは、ヤクザか政治家の家だと勘違いされやすいが、そんな生易しいものでないことを俺はよく知っていた。

余談だが、ここに居るメンバーは魔術や魔法といった異能について知っている。何故なら、この屋敷の主である、墜月銀蔵というあらゆる意味で超常的な存在を昔からよく知っているからだ。

留美奈が門を押し開き、四人は中に入る。石畳を歩いて奥の母屋に進み、横開きの扉を開く。

「お邪魔します」

「お邪魔しますーす!」

「ただいま帰ったよお袋様ー」

「ただいま」

それぞれ挨拶をする。大きな声ではないが、適度に響く声量を意識。

靴を脱ぎ、玄関から上がる。色々と魔術的な補強が施されているため、古くとも軋むことのない頑丈な床板を踏みながら、他の三人が靴を脱ぐのを待っていると、廊下の奥から軽やかな足音が響いてきた。それに反応して振り返った俺の胸元に、小さな人影が飛び込んできた。

「会いたかったよすばるくん……っ!」

目を潤ませながら嬉しそうに胸に顔を埋める少女――実際には二児の母親なのだが、見た目は十代半ばにしか見えないので少女と表

現しても差し支えないだろう——に、俺は苦笑する。

「三日前に会ったばかりでしょうに」

「でもでも、寂しかったんだもの……」

しゅんと俯く七夕さん。何とも愛らしいその仕草に和んでいると、三者三様の冷たい視線が背中に突き刺さるのを感じた。

……だから、なんでだよ。

「……ロリコン」

「このロリコン、いくらお袋様が合法ロリだからってイチャラブ空間を生み出しても許されると思ったたら大間違いだよ？」

「幼妻にまで手を出すとはきたないなさすがペド野郎きたない！」

何故俺はここまで罵倒されなければならないのだろうか。七夕さんはただ俺のことを心配してくれているだけだというのに。あれか？ 俺の悪人顔は性犯罪者に見えてしまうくらい凶悪なのか？

……泣きたくなってきた。

「仕方ありませんよ。今のあなた方のやり取りは仲睦まじい恋人のそれと大差ありませんし。……若干、犯罪の匂いがしますけどね」

気配はなく、からかうような声だけが聞こえた。

俺は声が聞こえた正面奥に向かって、ではなく、右横の壁に向かってポケットに仕込んだ鉛の玉を投擲した。

「おや、気付かれてしまいましたか」

金属同士がぶつかり合う甲高い音と共に、撃ち込んだ辺りから気配が波紋のように広がる。

俺は咄嗟に七夕さんを抱えて後ろへ跳んだ。

間一髪、小さな身体を庇う背中の中の紙一重を、上から下へ、天井から急降下した銀色の剣風が疾り抜けた。

片足で鋭いステップを踏む。

踏みつけた足の下で、表面が全て銀色で彩られた木刀が動きを止める。

引き抜いて二の太刀を放とうとしていた師匠は、ビクとも動かぬ木刀に、諦めて手を離した。

それと同時に、俺が投げた鉛玉と、師匠が投擲した棒手裏剣が床に落ちて、ゴトリという鈍い音を立てた。

「……随分と手荒い歓迎ですね、師匠。俺は稽古をつけてもらいに来たのではなく、昼食をご馳走になりに来たのですが」

「いやはや、ちょっとした茶目つ気ですよ。あとはそうですね、愛娘とイチヤつく弟子へのささやかな嫌がらせです」

「俺が防がなければその愛娘に棒手裏剣が刺さっていたのですが」「そこら辺はほら、信賴している証ということだ」

飄々と笑う狸——もとい、師匠に対して溜め息を吐く。七夕さんとは言うところ、「ふえ……？」などと小首を傾げていて、何が起こったのか理解が追いついていない。

数秒思考を巡らせた後、今日もおとーさんとすばるくんは仲良しね、とにへらと笑つてのけた。ある意味大物である。

墜月家の初代当主であり、元魔王（本人談）である墜月銀蔵は、とにかく掴み所のない、常に飄々とした謎多き御仁なのである。

形容しがたい美しさを放つ銀系の髪は腰まで無造作に垂れ下がり、優しげに見える琥珀色の双眸は全てを見透かすようにこちらを映す。凄絶な程整った貌には、常に何かを含んだ微笑を携え、そこに確かに居るはずなのに、居ないような、底の見えない存在。

実年齢は少なくとも百歳を軽く超えていると言つのに、その外見

はどう見ても二十代の青年のそれ。元魔王、という荒唐無稽な話も真実味を帯びてくるような、普通の人間では絶対にあり得ない何か取り敢えず変態の腹黒狸、というのが彼を知る者の共通見解であった。七夕さんだけは優しいおとーさん、との評だった。

「相変わらずアグレッシブな師弟関係だねえ、君たちって」

「祖父様おじいさまの一方的なからかいが大半を占めるけどね」

「……おじいちゃん、家の中で暴れないでくれる？」

「前向きに検討しますよ」

呆れ混じりの声が三つ響き、孫娘の非難にのみどころかの政治家のような返答を寄越す師匠。

「さ、お昼ご飯にしよう。今日はゴルゴンゾーラのリゾットと、あとデザートに柚子シャーベットがあるからね」

その七夕さんの掛け声に、先程の気のないやり取りを思い出して俺と湊、千紗の間に沈黙が流れた。

「……良かったな、千紗」

「なにそれ墜月家こわい」

「お母さん、昔から勘とか妙に鋭いからね……」

どこまでも無邪気な七夕さんに、ほんの少し恐怖を覚えたのは内緒の話。

第一章 腹黒女神・The Scheming Goddess - (後書き)

はい、またなんか一杯痛い設定盛り込んできた八百奈です。

久々過ぎる投稿、すみません。

ですが、諦めてください。仕方ないのです。

今回は魔術要素とか師匠が魔王（自称）だったりと盛り込んでみましたが、正直そこまでファンタジー全開な物語にする予定無いんですよね……。

留美奈絡みで某幻想殺しみたいにガチ魔術バトルとかやるかもですが、基本的には武術を盛り込んで……まあ、戦闘描写自信無いんですけどね。色々参考にして何とかカタチにはするつもりですが。

さて、今回七夕^{なつ}さんに萌えた方は是非お気に入り登録してください。七夕さん、一応未亡人設定で独身ですが、攻略キャラにはならないと思います。あくまで主人公のお母さん代わりであり癒し要素、言うなればCLANNADの早苗さん。あるいはと禁の小萌先生。

それでも萌えますひたすらに。下手したらメインヒロインより萌えます。

では、この辺りで。八百奈でした。

2010年10月21日 改訂

1 新たなる幕開け - The New Term -

新学期。

先週の千紗の家出騒動——毎度の事なので最早騒動と銘打っているのか大いに疑問だが——は、結局、騎馬さんが迎えに来て何事もなかったかのように終わった。

見合い云々については、騎馬さん曰く元々大した話ではなく、千紗が断固拒否するのならば白紙に戻すつもりだった、とのことだ。ならば何故千紗は家出してきたのかと問うと、『お嬢様はああ見えて存外奥手な処がごいます故、口実としては丁度良かったのでしよう』と返ってきた。

訳がわからない。何の口実だ？

家出のか？ あいつ、家出なんて傍迷惑な趣味があったのか。というかあいつが奥手だと？

『人間台風』、『歩く悪ふざけ（ザ・フリーダム）』で知られるあいつが、奥手？

騎馬さんの悪趣味に過ぎる冗談に、思わず頬がひきつってしまっただのは仕方のないことだろう。

それはさておき、今日からまた、学校が始まるのだ。

心踊る、とまではいかないが、少々浮わついた気持ちになるのは、春の特性とでも言うべきものだろうか。

最高学年として、生徒会長として、気を引き締めていかなばなるまい。

そう決意を新たにしていると、家のインターホンが鳴り響いた。

「ん……もうそんな時間か」

居間の時計を見やれば、そろそろ家を出る時間にさしかかってい

た。

鞆を持ち、玄関へ向かう。靴を履き、待ち人達の元へ向かうと扉に手をかけてから、ふと振り返る。

誰も居ない家。家族が確かにそこに居たはずの家。そこに、声をかける。

「行つてきます」

当然、返事はないけれど。今はそれでも良かった。

戸締まりをしてから、よく手入れのされた庭を突っ切ると、見知った顔ぶれが見えてきた。

「あ、やーっと来たか。あんまり幼馴染みを待たせるのは感心しないよ?」

「おはよ、昴」

少し気だるそうな留美奈と、いつも通り涼しい顔をした湊が、こちらに気付き声をかけてくる。

「おはよう。というか、わざわざ家まで迎えに来なくても良いんだぞ?」

たいした距離ではないとはいえ、学校とは正反対の我が家までわざわざ来る必要はないだろう。

「乙女心故だよ、昴。ぼくは単なるとばっちりだけど」

「乙女心?」

「……そんなことより、早く行かないと遅れるわよ」

意味深な台詞に小首を傾げながら湊を見やると、湊はやや露骨に話題をそらした。

特に気になる内容でもなかったし、あまり詮索すると湊の気分を害しかねないので、何も言わないでおく。

留美奈は湊に一睨みされて肩をすくめてから、「馬に蹴り殺されるのもごめんだし、この程度にしておくよ」と謎の言動を残してから、俺達の少し先を歩き出した。

湊はため息をつくと、視線で俺を促してから、留美奈に続く。俺もそれに倣い、湊の隣に並んで歩く。

「にしても、もう三年生になるのか……。いやはや、光陰矢の如しとは言い得て妙だね」

「お前の鳥頭じゃまともに覚えていられる出来事なんてたかが知れてるだろうし、早く感じるのも道理だろうさ」

ああ、別にこいつが原因で巻き込まれた数々の厄介事を、張本人が三日で忘れやがることなんて根に持ってなんかないぞ？

端的に事実を述べているだけだ。

「……感慨に浸らせてあげようって気概くらい持とうよ、ねえ？」

「あら、感慨に浸る程充実した学園生活を送っていたなんて驚きね」

「どうせそのフラグメーカーに比べれば駄フラグばっかのスッパ力の学園生活ですよチクショウ！ ていうかさっきの根に持つてるよね姉上！？」

「さあ、何のことかしら？」

気のせいかな湊が少々辛辣だが、まさしく気のせいだろう。というか、俺とて他人に羨ましがられるようなフラグを立てた覚えはない。大半が不幸フラグだ。

「お前がモテないのは素行が壊滅してるせいだろう?」

「ぐふう! ひ、人が気にしていることをサリと……っ」

「まあ、毎日変なことをしているものね。女の子からすればちょっと、というのが本音じゃないかしら」

「かふっ……! 集中砲火は勘弁ですマジで! ぼくのライフはとつくにゼロだからね!？」

「おいおい、どうした『燈ノ宮の奇行子』?」

「みぎゃあああああああ!?!」

断末魔の雄叫びをあげた後、パタリと崩れ落ちる留美奈。少々やりすぎたか、と思わなくもなかったが、自業自得すぎるので放っておく。

「それにしても、晴れてよかったな」

「ええ。桜も綺麗に咲いているし、新人生にとっては絶好の日になりそうね」

淡いピンクの花びらが道を優しく彩っている。ふわりと風が足音を立てれば、たちまち花びらが視界を染める。

謳われるような長い年月を経てはいないが、若く生命力にあふれた桜が春を喜んでいた。

うつすら目を細めて春を感じる湊に並んで、感嘆のため息をもらす。しばらく春の息吹をその目に焼きつけるように見入る。

「……ん? あれ、チルハじゃないか?」

三十メートル程先に居る、俺達と同じように桜並木に見蕩れている浅葱色の着物を着た少女。

ウチは私服アリの進学校なので、みんなそれぞれの服装で自分を

表現している。その中でも、校内でのチルハの姿はとても目立った。なにしろ、いつも着物なのだ。

質素な着流しの立ち姿はチルハの撫で肩によく似合っていて、桜並木をじつと儚げに見上げるその姿は、幻想的、とても表現すべきものだった。

「…… 本当ね。相変わらず、女の子を見つけるのが早いこと」

「人聞きの悪いことを言うな。…… というか、留美奈が号泣しながらチルハに向かって走ってるんだが」

「慰めてもらいに行っただけでしょう。情けない光景だわ」

それには同感だが、原因を作った張本人が言うのは間違っている気がする。

—— うわあああ、チルハ嬢ー！

—— ひゃわっ！？ る、るーちゃん？ なんで泣いとるん？ どこか痛いん？

—— 痛い、心が張り裂けそうなくらい痛い。だから慰めて！

—— え、えと……。よしよし……。

大の男が後輩の女の子に泣きついて慰めてもらう光景。なるほど、情けない。

幼馴染みの痴態を凝視する通行人に知り合いとは思われなくなかったが、チルハをこのまま放っておくことも憚られるので、せめてもの抵抗としてゆっくりと歩いて近づいていく。

「おはよう、チルハ」

「おはよう。愚弟が朝から迷惑を掛けて申し訳ないわね」

「あ、おはようすーちゃんとみなちゃん！ あの、るーちゃんどうしたん……？」

「気にするな、些細なことだ」

「むしろ矮小で劣悪なことよ」

「言葉の暴力って物をもう少し学んで欲しいんですが……！」

「なら言葉の警察を呼ぶべきね」

「予想通りすぎるわ！ このガハラさん二世！」

湊の辛辣な言葉に涙目でキレる留美奈。ガハラさんとやらは知らないが、大方無自覚にネタを口走ってしまったのだろう。

俺と同様、留美奈や千紗の毒牙にかかってしまっている幼馴染みに同情の念を禁じ得ない。

「それよりも、あまりのんびりしていると遅れるぞ。ただでさえ生徒会役員は早く登校する必要があるんだ」

「入学式と始業式を一気にやるような横着な真似をするからそんな必要が出てくるのよ」

まず入学式を終えてから始業式を執り行つたため、新入生及び吹奏楽部や生徒会役員以外の一般生徒は昼前に登校してくる。

何故そんな真似をするのかは知らないが、春休みが他校よりも長い弊害だろうか。

「……あ、そういえば。今年は新入生から新しい役員が選ばれるんやっただけ……っ？」

「ん、そうだな。俺達の時みたいに中等部の生徒会役員から立候補があれば、採用されるだろう」

自分の後輩が出来ることが嬉しいのか、わくわくと期待した表情

で尋ねてくるチルハ。

燈ノ宮学園の生徒会役員の選出方法は他校のそれとはやや一線を画している。

燈ノ宮学園は幼等部から大学までエスカレーター式の学園で、言わずもがな千紗の祖父が趣味で経営している学園だ。

幼等部から中等部までは同じ敷地内にあるが、高等部と大学はそれぞれ違う場所にある。

中等部において生徒会役員としての実績のある者は、高等部においても、希望する場合は一年生でも優先して選出される権利を持つ。俺と湊と留美奈は、前述した方法で、千紗を除いた前生徒会メンバーと入れ替わり、チルハは通常の選挙で選出されたのだ。……ちなみに千紗は今年引退する筈だったというのに、留年が決まった途端、仲間外れが嫌だという私情丸出しの理由で新たな役職を作り出し、今もなお生徒会に居座っている。

そんな横暴が一般生徒に「まあ、あの人だからなあ」という理由で納得されているのは、喜ぶべきか頭を痛めるべきか。

「今年の選出枠は一つだけだし、通常の選挙はまず行われないうね」

「ま、大学までエスカレーター式なのにわざわざ生徒会に入りたがるような人は居ないだろうし、不満は出ないでしょ」

チルハに慰められて復活した留美奈が会話に混じる。浮き沈みの激しい奴だ。

ちなみに、俺は中等部の時も望んで生徒会に立候補した訳ではない。いつの間にか立候補していることになっていて、いつの間にか大差をつけて副会長に選出されて、いつの間にか高等部においても生徒会に入ることになっていたのだ。

首謀者は言うまでもなく当時中等部の生徒会長だった千紗。留美奈は面白そうだからと一緒に立候補し、湊は俺のことを心配して（本人は否定するだろうが）立候補して、難なく選出されたのだ。

何らかの陰謀を感じずにはいらなかったが、理事長が千紗の祖父という時点で既に考えるだけ無駄だった。

「そつえば、みーちゃんは生徒会役員にならんの……？」

「柊なら即辞退したそうだ」

「今まで千紗嬢の補佐に徹してきたしねえ……。『メイドである自分がそんな大それた役職に就くなんておこがましいにも程があります！』だっけ」

「ご主人様より遥かに有能なのに、勿体無い話ね」

俺も再三勧めたのだが、結局柊は生徒会補佐という地位に甘んじたらしい。

千紗が生徒会特別顧問という役職を作り出して居座らなければ、その補佐すらも辞めていただろうし、その点においては千紗に感謝するべきか。

「……おや、噂をすれば何とやらだね」

「あ、ちーちゃんの車……っ」

話しているうちに赤煉瓦造りのやたら高い塀と、観音開きの、無駄に芸術性を感じ取られる檻のような鉄扉が見えてきた。

そこへ、まるで示し合わせたかのように颯爽と校門に向かって反対側から走ってくる黒塗りの高級車。

校門に差し掛かる前に緩やかに速度を落とし停車する。後部座席からメイド服に身を包んだ柊が出てきて、俺達に一礼してから、中にいる千紗を促す。

そこから無駄に優雅な素振りを見せて降りてくる千紗。新入生の視線を釘付けにしながら、千紗は俺達の方に駆け寄ってきた。

「やつほー、諸君。いい天気だねっ！」

「貴女はいつも能天気ね」

「やん。褒めても何も出ないゾ」

「褒めてないし鬱陶しい」

千紗はいつも通り全力全壊（誤字に非ず）だった。

「おはようございます、皆様」

「おはよう、柊」

「おはよう、みーちゃんっ」

「朝から大変ね、貴方も」

「おはよう。相も変わらず可憐だね、柊嬢。結婚を前提に付き合ってください」

千紗はスルーして、柊に挨拶する。朝から千紗のハイテンションに付き合うのは疲れるのだ。

というか、朝っぱらから挨拶代わりに口説くな留美奈。

「すみません、留美奈様。お気持ちは大変嬉しいのですが、わたしには心に決めた方がおりますので……」

「むー、駄目か。昂に飽きたらいつでも鞍替えして良いからね？」

「おい、勝手に柊の想い人を俺にするな」

いくら柊が女の子のような顔立ちをしているからといって、男を好むとは限らないだろうに。

柊自由は千紗の専属メイドで、昔から燈ノ宮家に仕えている、俺と同じ三年の生徒だ。その容姿は非常に可愛らしく、傍げであり、

大和撫子を彷彿とさせる。

一部の男子生徒から熱狂的な人気を誇る柊だが、その可愛らしい容姿に反して、言い寄ってくる相手を再起不能になるまで叩きのめすというアグレッシブさと力強さを併せ持つ、俗に言う『男の娘』なのだ。

ちなみに何故執事ではなくメイドなのかというと、その方が護衛や千紗の世話をする為に色々都合が良いからだそうだ。

「……同性愛に目覚めてしまった弟を一思いに殺してあげるのが姉の優しさかしら」

「いやいや、姉上。物騒なこと言わないでよ。というかぼくは普通に女の子が好きだし」

「そうだよつ、ミウっちは男じゃなくて男の娘なんだから。むしろこんなに可愛い娘が女の子な訳がないでしょ？」

「……意味が、分からないのだけど」

目をすうつと細めながら、二人に対する冷やかな侮蔑を隠そうともしない湊。

安心しろ、俺も分からない。大丈夫かこいつら？

「……馬鹿なことを言っていないで、体育館に行くぞ。もう新入生も集まってきているだろう」

これ以上生徒会の汚点を新入生に晒し続けるのも憚られるので、早々に体育館に向かうことにした。

〃

新入生が体育館に集合し、入学式が厳かに進められていた。生徒

会役員は、隅に待機している。

「——であるからして、新入生の諸君はこれからより一層、勉学、部活、その他何でも良い。死ぬ気で励みなさい。その為のサポートは全力でしてやろう。武術系の部活に励む生徒は特にな。わははははは——！」

「……以上で、理事長のお話は終了です」

理事長の豪快な挨拶が終わる。相変わらず豪放磊落ほうほうらいらくな人だ。

理事長こと、燈ノ宮ひのみや一心の趣味で、ウチの学園には空手、柔道、剣道は勿論、合気道や中国拳法、果ては棒術、杖術、槍術といった、武術系の部活が数多く存在する。

それらの頂点を決める為の武術大会を開催してしまうくらいの傾倒ぶりだ。

何故か俺まで強制参加させられてしまうので、あの人は少しだけ苦手だ。

そうこうしている内に、俺の名前が呼ばれた。

階段を登って、壇上へと毅然とした態度で歩いていく。マイクの高さを調整し、新入生達を見つめ、第一声を発する。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実 is 適当か？ 安心しろ。それでも、生きるとは劇的だ——！」

呆氣にとられる新入生達。留美奈がどうしても懇願するので、挨拶の中にこの台詞を盛り込むことになったのだが。

「新入生諸君、入学おめでとう。生徒会長の蘭昴だ。

君達は、何の為に我が燈ノ宮学園に入学し、3年という月日をかけて何を成し遂げようとしているのか。

まずは信念を持ち、目標を掲げ、それを大成すべく励んで欲しい。

俺は、心から君達を鼓舞^{こぶぎらい}激励する。

高校生活は短い。ただ卒業に必要な授業を消化していくだけの日々では、瞬く間に終わりをとげる。

君達は、それでいいのか？

それで青春時代を生きたとと言えるのか？

否っ――！

バン――！と演台を強く叩く。

マイクのハウリングが体育館内に響くが、耳を塞ぐものは誰一人としていない。

「俺は面白いことがしたい。

面白いとは、精一杯、喜び、苦しみ、笑い、泣き、怒る、その集大成だ。

俺についてくる者には、最上級の面白さをくれてやる。

最高の一年を一生の思い出にしよう、俺と共に！

――以上だ」

――パチ、パチ、パチ。

呆氣にとられていた新入生から、徐々に拍手が起こる。最終的に割れんばかりの拍手と歓声に包まれながら、壇上から退場する。

「お疲れ、昴。流石というか、天性のカリスマだね、もう」

「やり方さえ学べば人の心を掴むことくらい造作もないと思うが……。というか、いい加減ネタを言わせようとするのをやめないか？」

「挨拶代わってくれるなら良いけど？」

「却下だ。何を口走るか分からんからな」

ちえー、と口を尖らせる留美奈。お前や千紗に任せたら生徒会が

阿呆の集まりだと思われかねない。

それから程なくして入学式が終わる。新入生はそれぞれ割り当てられた教室へ向かい、担任から説明を受けて帰宅する予定だ。

俺達にはまだ始業式が残っているので、一旦教室に行くことになっている。

その前に、クラス分けの張り出しを確認しなければならない。今年は、いったいどんなクラスで一年を過ごすことになるのだろうか。

くく

「……千紗。まさかとは思うが、テコ入れはしてないだろうな？」

「私は何も。お爺様に聞けば？」

「今回のクラス分けについては、先代様は関与していないそうです」

「単に暴れ馬の手綱を握る人間が必要だと判断されたからじゃない？」

「？」

「「ああ、納得」」

「納得すんなバーカバーカ！」

「どちらにせよ、厄介者を一纏めにされたという印象が否めませんね」

と言うわけで、俺と湊と留美奈と千紗と柊は、三年十三組に配属された。何故か十三組という数字に千紗と留美奈が過剰な反応を示していたが、どうでも良いことだろう。

チルハは二年生なので一人だけ別れてしまったが、大丈夫だろうか。虐められるということは流石にないだろうが、一人ぼっちになつていないか心配だ。

「……何を考えているか大体想像が付くけれど。過保護はあの娘の為にならないわよ」

「ホント、お父さんは心配症で困るよ」

「……誰がお父さんだ」

考えが見透かされていたようで、留美奈と湊に呆れ混じりにたしなめられる。

自分でも過保護だと自覚しているが、チルハのこととなると、どうも正気ではいられなくなる。

（……まだ、引きずっているんだろうな。まったく、昔のことだというのに）

思わず自嘲の笑みがこぼれる。

もう、あの時のようなことは起こらないだろうし、起こさせない。かなえに頼まれたからではない。何よりも、自分の為に。

「愛されてるねえ、チルハ嬢も。どうする姉上？　恋敵が着々と増

えてるけど」

「……何を言っているか分からないけれど、別に私には関係ないわよ」

「はいはいシンデレッシンデレ」

「——っ！　……………そう、死にたいのならそう言えば良いのに」

留美奈のからかいに頬を紅潮させて俯きながらプルプルと肩を震わせた後、スッと顔を上げる湊。目が据わり、冷ややかな笑みを浮かべている。

魔王降臨。

「うえっ！？ いやあの姉上？ これは冗談だからその振り上げられた拳を下ろしてくれると大変助かりますっていうか千紗嬢ヘルプ！！」

既に避難していた俺と柊。

唯一近くで観戦モードに入っていた千紗に助けを求めているが……人選ミスにも程がある。

千紗は面倒臭そうな素振りを見せて、救難信号に応じる。そう、あくまで素振りだけ。

背中からしか見えないが、あいつのことだ。確実にニヤリと口角を上げているだろう。

「仕方ないなあ。それじゃ、泥舟に乗ったつもりでおねーさんに期待しなさい」

「出来ませんから！」

「えー、ワガママだなあ。それじゃ豪華客船に——」

「タイタニックってオチも要らないってば！！」

「《助け舟を出す、ただしブラックパール号》かつ《溺れる者は藁をも掴む、ただしわら俵建築》にして《俺この戦いが終わったら結婚するんだ、ただし相手は部屋のポスター》み・た・い・なー！」

「巫女子も要らねえ——！！」

……相変わらず学習しない奴だ。

今度は物理的に魔王に肅正された留美奈を横目に、残りの十三組の生徒を確認する。

……個性的な面々が纏められているな。
かみしろ さくちまいり このえ
神代に桜参に近衛に……。

「……なんだ、壱崎まで居るのか」

「ウチがどないしたん？」

背後からかけられた声に振り向けば、明朗快活という言葉の似合う、亜麻色のポニーテールの少女がいた。

「あら、秋沙。随分早いわね」

「えへへっ、まあな」 はよ新しいクラスの面子確認したかったし。……それより、その奇行子らしきナニカは何なん？」

壱崎が指差す先には、三十秒前までピンピンしていた留美奈がボロ雑巾となつて横たわっていた。

流石湊、必殺仕事人も真つ青な処刑速度だ。一体どんな無敵コンボを繰り出せばあんな生かさず殺さずの状態を三十秒で作り出せるのだろう。

「気にしなくて良いわ」

「そうなん？ てつきりウチのツッコミ待ちかと思つてんけど。ま、違ふならええわ」

いつもの事と判断され、興味の外となつた留美奈。あまりの哀れさに黙祷を捧げてから、壱崎に向き直る。

「これから一年同じクラスな訳だが……揉め事は起こすなよ？」

「その台詞、そっくりそのまま返すわ。会長さん」

「俺は揉め事なんて起こしてない。勝手に俺の周囲で揉め事が起きるんだ」

「人はそれを屁理屈と呼ぶんやで？」

「歴然たる事実だ！」

千紗といい壱崎といい、失敬な連中だ。

「それよか、はよ教室行こ？」

「ん、そだね。れつつこー」

「……あの、留美奈様は放っておいてよろしいのですか？」

「ん……、どうせその内回復するだろうが、新入生を怯えさせるかもしれないしな」

仕方ない、と嘆息して、ボロ雑巾と化した留美奈の元へ歩み寄る。しやがみこんで、耳元に顔を近付けて復活の呪文を唱える。

「（……柊がメイド服をはだけさせながら上目遣いに誘惑してきてるぞ）」

「なんですとオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！
！！」

ズドン！！ と轟音を鳴り響かせて勢いよく立ち上がるメイド好き。

……自分で言っておいてなんだが、駄目だこいつ、早くなんとかしなければ。

「どこ！？ 堕天使エロメイドの格好でご奉仕してくれる柊嬢はどこ！？」

そこまで言っていない。

「……最低」

「ウチのミウっちを使ってナニさせる気さー！！ 見損なつたよ昴君！」

「……ていうか堕天使エロメイドってなんやねん」

「だ、ただ堕天使、エロメイド……ッ！？ ご、ご奉仕……ッ！？ すっ、昴様でもそこまではちょっと……。そ、それにあの衣装を着るには胸が足りませんし……」

俺にまで軽蔑の視線を送ってくる女性陣。柊はパニックを起こしている。あと奉仕の対象は俺なのか。

「……留美奈。齒、食いしばれ」

「へ！？ いや待って今のは違うちよつとした本音なんだゴフウ！」

言い訳にすらなっていない暴露をする留美奈の鳩尾を殴り気絶させ、そのまま肩に担ぐ。

冷たい視線を容赦なく浴びせかけてくる女性陣と、パニックのしすぎでショートを起こしかけている柊の誤解を解きながら、十三組の教室に向かった。

）
）

「三年！」

「十三組！」

『クラウド先生——ッ！！』

「蔵人だっつってんだろぅがクソガキ共オ！！」

始業式の後、阿呆丸出しの掛け声と担任教師の怒号に包まれて、新学期最初のHRが始まった。

……クラスメイトの尊厳を保つために言っておくが、先ほどの掛け声は千紗と壱崎を主体とした、元気すぎる一部の生徒によるものだ。

……その一部がクラスの半数に届かんとしていることは気にしては負けなのだろぅ。

元々ウチの生徒は総じてノリの良い性質を持つし、中でも特に変わり種ばかりを寄せ集められた十三組は言わずもがな。

担任となった齡二十八の大石教諭には同情を通り越して冥福を祈る。

「オイ、蘭！ 生徒会長ならこいつらどうにかしやがれ！」

「はは、無茶を仰る。そんな偉業を成し遂げるより世界征服の方が幾分か現実的ですよ」

「こいつらは核弾頭か何か！？」

「始末に負えないという点では似たようなものでしょうね」

頑張れ、大石教諭。超頑張れ。

投げやりな応援をしながら、教室内を見回す。

大石教諭の弄り方を画策している千紗。くあ、と欠伸を漏らす留美奈。

その一つ前の席に座る、大石教諭に同情の視線を投げかける湊。

その隣にいる、俺と千紗と大石教諭をオロオロと見回す柊。

俺の後ろにいる、先ほどから背中をツンツンとつついてくる壱崎。

「（……なんだ、壱崎）」

「（ん、さっき言い忘れててんけどな）」

こちらが小声なのに合わせてか、流石に空気を読んでかは知らないが、声を潜めながらニコニコと笑っている壱崎。

「（これから一年、よろしゅうな、会長さん）」

「（……ああ。よろしく頼む）」

壱崎のあまりに無邪気な笑顔につられて、小さく笑みを浮かべながら返答する。

途端にボン！ と蒸気を上げるかのように壱崎の頬が真っ赤になった。

「（……壱崎？ どうした、体調でも悪いのか？）」

「へっ！？ い、いや。なんでもないなんでもない！！」

春休み挟んでたから耐性が……、とブツブツと呟く壱崎。

耐性？ ……もしかして、俺の悪人顔に対する耐性か。耐性がなければ直視できない程の悪人顔なのか。……凹む。

「早速イチャついてンじゃねえぞ蘭イ！ テメエは相変わらずだなあこの歩く女性ホイホイが！！」

「……言いがかりをつけるのはやめてもらえませんか？」

「せやで、クラスメート同士の親交を深めようとすんのを邪魔すんのは担任としてどうなん？ クラウド先生」

「だから蔵人だっつってンだろうが！」

「えー、カッコイイと思うけどなあ、クラウド先生。せやったら、大石刑事なんてどうや？ ちょうど漢字も一緒やし」

「普通に大石先生って呼べねえのかテメエらは！ あんな小太りの薄気味ワリオッサンと一緒にすンじゃねえよ！」

「あ、クラウド先生もひぐらし知ってるんや」

「うつせえ悪いかコラ。っーか蔵人だっつってンのが分からねえのかクソガキ」

疲れたようにため息を吐くと、大石教諭は話をぶった切って、連絡事項だけを淡々と告げると、「自己紹介だの何だのがしたけりや勝手にやってるガキ共。俺は知らん」と投げやりな言葉を残して退散した。

大石教諭には今度胃薬をプレゼントしよう。

「蘭」

「ああ、神代か。なんだ？」

放課後となり、早速色めき立つ教室の中、隣の席に居た神代が話しかけてくる。

神代凜。規則にそこそいい加減なウチの学園で、妥協を一切許さぬ厳格な風紀委員長。

かと思えば、意外な部分で又けていることがある、存外可愛らしい所のある友人である。

「ん、いや。その、なんだ……せつかく同じクラスになったのだからな。挨拶くらいしておこうと思ってだな」

「ああ、そうだな。これから一年、よろしく頼むよ。神代には色々世話になるだろうしな」

「それはこちらの台詞だ」

風紀委員会と生徒会の連携をとることもしばしばあるし、神代とはそれなりに友好を深めている。

……まあ、他にも接点はあるのだが。

「……ああ、そういえば。父さんがボヤいていたぞ？ 調書に追われて忙しいと。相変わらず面倒に巻き込まれているんだな」

「ああ……まあ、な。蓮土さんには悪いが、いちいち警察の事情聴取にも付き合ってられないんだ」

「それは分かるが。一切表彰も受け取らないし、警察の面子を考えるとも言っていた」

「それこそいちいち付き合ってられない。第一、自ら首を突っ込んでいるのならともかく、俺は巻き込まれただけなんだからな。善良

な市民が非難される謂れはないさ」

「この町の検挙率がほとんどお前によって維持されていれば文句の一つも言いたくなるんだろう。たまには付き合ってやってくれ。…まあ、蘭のおかげで父さんも昇進したようなものだしな。あまり強くは言えないが」

「……気が向いたらな」

蓮土さんには悪いが、こればかりは仕方がない。

と、そこへ横槍が入った。

「お、凜ってば早速アタック？やるねー」

ひょっこりと顔を出したのは、神代の友人の桜参だった。

「……邪推するんじゃない、由奈。単に挨拶をしていたただけだ」

「そう？ あんまり二人がお似合いだからデートのお誘いでもしてるのかと思っちゃった」

「由奈っ！」

桜参のからかいを神代が咎めると、桜参は手をひらひらさせて退散した。

「まったく……。あ、蘭。気にしないでくれ」

「いや、俺は構わないが……相変わらずだな、お前達は」
「蘭達には敵わないさ」

お互いに苦笑する。

友人のおかげで気苦労が増える所も、それを悪くないと思う自分

がいるという所も、どこか似ている友人だった。

おそらく、神代も同じことを考えていたのだろう。

「それじゃ、また明日」

「ああ。またな、蘭」

神代に別れを告げ、まるでそれが当たり前であるかのように湊達の元に向かう。

いつか終わりを告げるのだとしても、この関係は、俺にとっても心地のよいものだった。

1 新たなる幕開け - The New Term - (後書き)

こんにちは、ヒロインを増やしてみたのは良いもののちょっと増やしすぎたかと焦っている八百奈です。

白状します。秋沙と凜と由奈はノリで追加しました。扱いた的にはサブヒロイン、あくまで昴のよき友人です。出番もあんまりないです。残る近衛は男性キャラにしようかと思ってます。無論脇役です。

キャラ設定は後で考えます。やめて、石を投げないでっ！ この小説、もともとノンプロットなんですっ！

次回、『動き出す生徒会』

……サブヒロイン、もう一人増えます。

2 動き出す生徒会 - Welcome New Students -

）
）

入学式兼新学期から数日後。

新しいクラスにも馴染み始め、大石教諭の怒号にも慣れ始めた頃。

「新入生歓迎会……っ？」

「ああ。去年もやっただろう？ 生徒会役員を交えた、初めての行事だ」

昼休みに昼食を兼ねて、いつもの面子で生徒会室に集まっていた。きよとんと小首を傾げるチルハに和みつつ、説明を続ける。

「今日の放課後から新しい役員がやってくるから、来週の新入生歓迎会に向けて準備を進めていくことになる」

「去年は生徒会主催でお茶会を開いたわね。……誰かさんのおかげで一部阿鼻叫喚の地獄絵図だったけれど」

湊の嫌味に口笛を吹きながら明後日の方向を見る千紗。

……誤魔化し方が古すぎる。

前回の新歓パーティー（新入生歓迎会の俗称）の際、ケーキと紅茶の用意を千紗に任せたら、『ハズレ』と称したハバネロ入りケーキや、砂糖を異常な程投入した極甘ケーキなど、食への冒涇とも呼ぶべきケーキが大量に用意され、不幸にもそれを引き当てた一部の

生徒には大不評だった事は記憶に新しい。

ちなみに俺は当然のごとくハズレケーキしか食べられなかった。
結果、数日間味覚が麻痺した。

「言っておくが、千紗。今年は真面目に行くからな」

「押すなよ、絶対押すなよ！　ですね、わかります」

前フリじゃない。

どこまでも自分に都合の良いように物事を解釈する千紗に、出来の悪い娘を見るような目で、ポツリと呟く。

「……いつそ当日までどこかに監禁しておくべきか」

「《手札ワイルドカード四枚、ただし隣がスキップカード四連続使用》みたいなの？」

「……貴女はいい加減自重というものを学んだらどうかしら」

「だが断る！」

「会話を全部ネタで片付けてる時点で自重する気ゼロだよねー」

正直、千紗を生徒会に留ませたことは失敗だったと後悔している。柊のフォローを差し引いても、この阿呆がしでかす騒動を鎮圧するのは割りに合わない。

何が割りに合わないって、騒動に真っ先に巻き込まれるのは、不幸スキルを十全に発揮する俺で、後始末をするハメになるのも俺なのだ。

「……千紗様。流石にお戯れが過ぎるか。昂様に迷惑をかけるのは、あまり感心できません」

「ちーちゃんっ。一年生を楽しませないかんのやから、きちんとせな……っ」

「ちえー、分かったよ……つまんないの」

柊とチルハの窺める声に、渋々と心底つまらなそうに頷く千紗。

「そういえば、新しく入ってくる子って、どんな子？ 中等部の生徒会長って話だったけど」

「ああ、二年の時に転入してきたにも関わらず、ダントツで生徒会長に選出されたらしい。

名前……近衛^{このえくるる}枢、だったか」

噂で聞いただけで、顔は知らないが、大層人気だった生徒会長らしい。陰謀により無理矢理選出された悪人顔の俺とは大違いだ。

何せ毎朝一般生徒に「おはようっす、会長。今日もム力つくぐらいイケメンっすね」と皮肉られるのだから。

「枢嬢かー。可愛い名前のね……ん？」

女子生徒と分かるや否や、期待した面持ちになる留美奈だったが、その名前に何か心当たりでもあるのか、思案顔になる。

「ねえ、昂。

その枢嬢って、ひょっとしてククリの妹さん？」

「近衛の？」

確かに苗字は同じだが……近衛には十二歳くらいのやたら元気な妹が一人いるとしか聞いてないぞ」

ウチのクラスの貴重な常識人の一人、近衛^{このえくるる}八十一鱗。

無表情でクールだが、実はシスコン疑惑のあるクラスメイトだ。

「……そういえば、近衛様がウチの学園に来られたのも、二年前でしたね」

「ああ、一年の中途半端な時期に越してきたんだつたな。
……偶然、とは考えづらいか。特にどうと言っわけでもないが、
あとで近衛に確認してみるとしよう」

柊の指摘に頷くと同時に、予鈴が鳴り響く。

「さて。予鈴も鳴ったことだし、そろそろ教室に戻るとしますか」
「ん、そうだな。それじゃ、チルハ。午後の授業も頑張れよ」
「……うんっ！

お昼ごはんの後は眠くなってしまうのやけど、がんばる……っ」

意気込むチルハの頭を撫でてから、俺達は解散した。

〃

「近衛、少し良いか？」

所属する生徒のほぼ全員が何らかの部活動に加入している三年十三組の放課後は、実に両極端な構図によって始まる。

終礼を済ませるやいなや閃光のように飛び出していくのは武術系の部活で、どうやら聞くとここによれば少しでも集合時間に遅れると過酷な懲罰練習を課されるらしい。

それ以外の部は進学校らしく良い意味でほどほどなルーズさを備え、集合時間に関してもさしてうるさくはないらしいので、めいめいの部活ごと、もしくは友人グループごとに集まって数人でギリギリまで駄弁ってから活動に向かうのがいつの間にか慣習になっていた。

つまりは皆、教室を出るのがやたら早いか遅いかどちらかの行動

パターンに従う。

ウチの学園ではむしろ珍しい帰宅部員である近衛は、終礼の後だらだらと帰宅の準備を整え、まっすぐ教室を後にしようとしていた。湊達に先に行ってもらうように伝えてから、近衛に声をかける。

「？ どうした蘭。僕に何か用か？」

「ああ、大した用じゃないんだが。近衛に妹が一人居るって話を前にしただろう？」

「……ああ、その話か。そういえば枢のヤツ、無謀にも生徒会に入るらしいな」

こちらの話の切り出しから用件を悟ったらしく、理解できないモノを見るような目になる近衛。ウチの生徒会は魔窟か。

……否定できない要素がありすぎる。超不幸体質に元魔王の孫娘に現役魔法使いに神憑きの巫女に人間台風に肉体派メイド。

……魔窟以外の何物でもなかった。

「まあ、色々と迷惑をかけると思うから、妹をよろしく頼む」

「ああ、任せろ。何があるうと生徒会色には染めないから」

「その物凄く斬新な色が気になるがそっちの心配はあんまりしてない。負けず劣らずアレな妹だから」

既に手遅れだそうだ。

よくよく考えれば個性的な面々の多い燈ノ宮学園の生徒会長という時点で既にまともである可能性が低かった。

……言っておくが俺はまともだ。肉体的スペックはともかく人格面においては。

「それじゃ、僕はこれで」

「あ、ああ。また明日」

こちらの用が済んだと悟った近衛は、さっさと帰って行った。

「……ん？ 結局、近衛の妹はいくつなんだ……？」

結局分らず終いだったが、どうせもうすぐ会うことになるのだから、気にする必要はないだろう。

そんな風に考えながら、黒板脇の引き戸の近くでたむろしている二人組の女子生徒の脇をすり抜けようとすると、ザザッ！ と擬音がつきそうな勢いで避けられた。

「……そう露骨に避けずとも良いだろう」

「あ、いや。その、ごめんなさい」

咄嗟の事だったのか、気まずそうに視線を逸らしつつ謝ってくる。あくまで目は合わせてもらえない。

「……もういい、慣れた。あまり遅くまで残っていないで、早く部活に向かうことだ。一之瀬に袴田」

「あ、うん。生徒会、頑張つてね。あららぎ君」

「らが一つ多い。……そっちもな」

最近使い古しになってきた言い間違いを指摘しつつ、教室を後にした。

——びっくりした……相変わらず目に毒だわ、あの会長。

——それより、名前、覚えてもらえたね。あららぎ君のことだから、きっと全校生徒把握してるんだろうけど。

背後でにわかに色めき立つ女子生徒にどんな噂をされているかなど、聞きたくもなかった。

俺が所属する三年十三組は、面倒なことに様々な場所へアクセスの悪い旧校舎の三階に位置している。

北側の隣は予備のための空き教室で、歩きながらちりと中を覗き込むと、何組かの男子グループが麻雀やポーカーに興じていた。賭博は禁止であることを念のため忠告してから、渡り廊下を抜けて、新校舎の五階にある、その一番端の生徒会室にたどり着いた。

無駄に豪華な扉を開き、室内に一步踏み出すと同時に。

視界を真紅の物体が覆い尽くした。

「——っ!？」

一瞬身構えるも、その正体が小さな人影であると気付き、慌ててその華奢な体を抱き止めた。

すりすりすりすりくんくんくんすりすりすりすりふんふんふんふん……。

俺の胸に頬擦りをしながら匂いを嗅いでくる紅髪の少女。……どういう状況だこれは？

取り敢えず恍惚の表情を浮かべる少女の首根っこを掴み、だらーんとぶら下げてみる。

「にやわっ！？ か、かいちょー？ 何をするのですか！」

「こちらの台詞だ。まったく、どこから紛れ込んだんだ？」

「野良猫みたいに言われるのは心外なのですっ！」

「……で、誰だこの子供は。子守でも頼まれたのか？」

ぎゃーぎゃー騒ぎ立てる少女をぶら下げたまま、既に集合している連中に説明を求める。

「いやー、そのなんていうか」

「ねえ……？」

顔を見合わせたまま苦笑する千紗と留美奈。チルハはぶら下がったままの少女の喉を撫でてあやしている。……猫か。

「ごろごろにやー……じゃなくてっ！ 新しい生徒会役員にこの仕打ちはあんまりなのです！」

「……………は？」

ぶら下がったままこちらを上目遣いに睨み付けて、フシャー！と威嚇してくる少女相手に、俺は頓狂な声をあげることしかできなかった。

くく

「……で、お前が近衛の妹の、近衛枢で、新しい生徒会役員だと？」

「あい！」

「……八歳ぐらいにしか見えないが、年齢は？」

「れでいーにその言い草は失礼なのです！ ちなみに十二歳です」

「どちらにせよおかしいだろう。初等部はここじゃないぞ？」

「飛び級というヤツです、かいちよー」

「……嘘はよくないぞ」

「嘘じゃないもん……っ！」

俺の疑わしげな態度に大層ご立腹であるらしい近衛妹。すると鞆をゴソゴソと漁り、黒いカードを取り出した。

「ほらっ、学生証っ！ これで文句ないでしょ？」

パンツ、と突き出されたソレは、確かに高等部に在学することを証明するものだった。

「……にわかには信じがたいが、本物だな。というか、ウチの学園飛び級制度なんか採用してたのか……」

あると知っていれば、さっさと学校を卒業していたのに。

「なんか三年前にお爺様が気まぐれで採用したらしいよ。制度が適用される生徒はこの子が初めてなんだって」

「へえ……。実験的な意味も兼ねてるのか」

「多分ね。で、中等部で十分過ぎる実績を残したから、来年からはもつと飛び級枠を増やそうって話になってるの」

「まあ、納得はした。悪かったな、疑ったりして」

「まったくです！ れでいーは繊細なですよ、かいちよー」

薄い胸をピンと尊大に張る近衛妹。
しかし。

「……で、いきなり飛びかかってきた理由をまだ説明してもらって

ないぞ？」

「う。あ、あれは良い匂いが近づいてきたから身体が勝手に動いたってどうかその……ごめんちゃい」

シユンと俯く近衛妹。

……という理屈だ。そもそも、良い匂いが近づいてきたって、扉越しでそんなものが分かるのか？

「……要するに犬並みの嗅覚を持った匂いフェチである、と」

「……あい」

「ね、ねえねえ……っ。すーちゃんって、どんな匂いがしたん？」

「天にも昇るかぐわしき香りでしたっ！」

妙に興味津々に目を輝かせるチルハの問いかけに、ビシッ、と拳手をしながら興奮気味に答える近衛妹。

……昇天しそうな体臭って、何なんだろう。いっそ危険物認定を受けそうだ。

「それで、ああ……」

「柩で構わないですよ、かいちよー」。

にーさまとこんがらがっちゃうし」

「そうか。それじゃ、柩。他の面子とはどうやら自己紹介は済んだようだし、俺も一応しておこう」

俺の言葉に居住まいを正す柩。そこまでかしこまる必要はないのだが、敢えて言うこともないだろう。

微笑ましい仕草にほんの少しだけ口元を緩め、口を開く。

「それじゃ、改めて。」

生徒会長、蘭昴だ。ようこそ、生徒会へ」

「……………ふえ。あ、は、はいっ！　こちらこそよろしくです！」

ポーツと惚けたかと思うと、突然夢から覚めたかのように慌てながら返事をする枢。

「……………？　まあいいか。それより、早速新歓パーティーの会議を始めるぞ。」

飛び切りのもてなしを、新入生にしなければならぬからな」

不敵に微笑み、生徒会室を見渡す。

こちらを満面の笑みで見返してくるのは留美奈と千紗。

きっとまたろくでもない案を考えているのだろう。今年も引っ張りまわしてくれるに違いない。

うずうずと楽しそうにしているのはチルハ。

去年は自分がもてなされる側だったせいか、気合いが入っている。うむ、ちょーかわいい。

相変わらず女性と見間違えてしまう程の美貌で、柔らかに微笑み返してくるのは柊。

きっと、今年も柊には頼りきりになってしまうのだろう。生徒会の最後の良心だ。

やれやれと言わんばかりの呆れ顔で、それでも仕方ないわね、という顔で見返してくるのは湊。

何だかんだで自分の隣に立ち、支えてくれる面倒見の良い幼馴染

み。

そして、これから起こることにわくわくとしているのは枢。
安心しろ。生徒会長として、とびっきりの一年をプレゼントしてやる。

満足気に彼らを見渡してから、俺は重厚感のある特等席に座り、
お決まりの一言を繰り出す。

「それじゃ、第一回、生徒会会議を始める——」

2 動き出す生徒会 - Welcome New Students - (後書き)

こんにちは。文才のなさを嘆くばかりの八百奈です。

しはらくは日常編をやります。
バトルパートはそのうちに。

あ、感想もらえると嬉しいです。やる気に繋がります。

テスト前なので、次回の投稿は来月の半ばになるかと。

では。

読んで頂いた皆さまに無上の感謝を。
八百奈でした。

3 悪戯好きの女神様 - Trick or Trick? -

『……………』

かつてない程に重苦しく静まり返る生徒会室。

俺と湊は言わずもがな、あの留美奈や千紗でさえも、沈黙を保ったまま。チルハと柊は困惑を表情に浮かべ、ただ無邪気に振る舞っているのは柊のみ。

先週の新歓パーティーが原因ではない。今年の催しは学園内の敷地の所々に植えられた桜の木を愛でる、花見大会であつたが、それに関しては何しろ大成功であつた。

案の定、サプライズとして千紗が独断で特大花火を真つ昼間から打ち上げたりしたが、幸い生徒のウケは上々であつた。

では、この重苦しい空気は何によつてもたらされたものか。

「かなえ様ー、お茶お持ちしましたですよー」

「んむ。柊はほんに良い子だのう」

「えへへ。それほどでもあるです」

「うむうむ。苦しゅうない」

生徒会室に我が物顔で居座る人外。

銀の粒子を撒き散らすかのように光彩を放つ髪に、対照的な金の瞳。

冷たい視線に晒される中、柊にだけは敬われて嬉しいのか、口元には得意気な笑み。

叶絵の地の土地神であり、チルハの憑き神である悪女が、ゲームという名の災厄を運んできた。

「……して、なにゆえお主らはそのように通夜の如く沈んでおるのかの？」

ズズ、と差し出された茶をすすりながら、こくりと首を傾げるかなえに、俺は怨嗟の声を腹の底から絞り出すように繰り出す。

「……誰のせいだと思ってる」

「はて、誰かのう？ 純真無垢でぷりちーな妾には皆目見当がつかぬが」

「「きめえ……」」

「いつから純真無垢という言葉は奸知佞悪かんちねいあくという意味になったんだ、疫病神」

「ほんに失礼だのう、お主らは……」

しなを作るかなえに口を揃えてドン引きする留美奈と千紗。もつとも、こいつがこの二週間の間引き起こした数々の厄介事を鑑みれば、当然の反応であるのだが。

「敬意を払うべき相手をわきまえているというだけの話だ」

「……ほんに失礼だのう。それでも神だというに」

「疫病神が何を言う？ だいたい、日本神話において神とは必ずしも敬わなければならない存在ではないだろう。貴様は打ち倒される類いのそれだ」

「うつさい死神」

「……っ、その厨二臭い頭の悪そうな名前で俺を呼ぶなと何度言えは分かる！！」

口をすぼめ、拗ねた様子で俺の逆鱗にべたべたと執拗に触るかなえ。

身に降りかかる火の粉を払い、火種を始末した、ただそれだけの行為に恐れおののいた連中に付けられた通り名。

一切の慈悲を見せず、行うのは常に殲滅戦。そんな畏怖と憐憫と嘲笑と侮蔑が込められているらしいが、迷惑以外の何物でもない。他にも『災厄地獄』^{ヘルカラムティ}だの『生殺与奪』^{デッドオアアライヴ}だの、どの二つ名メーカーだと言わんばかりの頭の悪そうな物騒なあだ名が勝手に付けられている。

「……それで、何の用だ。今度はいったい何をやらかすつもりだ」「別に？　ただ遊びに來ただけだからのう。ゲーむをするのも良いが、あまり立て続けにやると飽いてくるというものよ」

胡散臭そうにかなえを睨むが、飄々と微笑むばかり。枢を除いた面々、特にチルハの胸中には、ある疑念がよぎっていた。

何故今更姿を晒し、俺達にちょっかいをかけてくるのか。

そもそも、チルハとは中学の頃からの付き合いだ。かなえの話が本当だとするならば、チルハは十四の時にかなえと契りを交わし、かなえはチルハを憑^{よりまし}坐に、この地に現界していられるのだと言う。

ところが、チルハは俺達にかなえの事をおくびにも出さず、今まで黙っていたのだ。

思い返してみれば、かなえが俺達に接触する時、チルハはいつも当惑するような表情をしていた。

今更神だの妖怪だので動じるような面々ではないし、チルハがひた隠しにする理由はない。何らかの秘匿すべき理由があつたのなら、何故今更のこのこと出てきたのか。気まぐれか、それとも何か企んでいるのか。

どちらにせよ、俺達のかなえに対する不審感が高まるばかりであった。

「まあそれは置いて。昴、あの件はどうなったかの？ 誰か良い相手は見つかったか？」

「……居るわけないだろう、そんな相手。嫌みを言いに来たのなら帰れ」

「むしろお主の発言の方が最大級の嫌みだと思うがのう……」

また訳のわからないことを。そもそも、俺に恋人なんか必要ない。欲しいと思えないし、その資格も在りはしないのだから。

「え、ていうか何の話？」

「昴が絶賛恋人募集中という話かの」

「……………は？」

サラリと爆弾を投下するかなえ。□元が妖しく嘲^{わら}っているあたり確信犯だろう。……この野郎。

「え、ちょ、待って待って。……今の、ホントの話？」

「いや、ないでしょ。フィユ嬢の事もあるし、そもそも昴にそんな願望があるなら彼女の百人や二百人あつという間だし」

「かいちよー、恋人探ししてるのですか？」

「コレの言うことを鵜呑みにしては駄目よ、枢ちゃん。どうせいつもの戯言に決まってるわ」

事情をよく呑み込めていない面々。

湊はフィユの名前が出てきたせいか、少々不機嫌になっている。

「正確にはお嫁さん探しだかの」

「す、すすすーちゃんのお嫁さん!？」

「すつ、昂様のお嫁さん……!？ いえ、そんな、しかし。そ、それに日本では同性婚は………」

「何それ何それ何それ! てゆか、私それ立候補します!」

ボツと赤面し混乱するチルハと柊。柊は興奮してズビシと手を拳げるが、おそらくよく意味を理解していない。立候補されても困るんだが。

「うーん、ここは私というものがあいながらー、とか言うべきかな?」

「いや、許嫁はなかったことになったんでしょ？」

「そーだけど、展開的に」

「どうでも良いけれど、いったいどこからそんなおかしな話が出てきたのかしら」

それらとは対照的に、冷静に話をする千紗達。流石に荒唐無稽すぎたのか、信憑性に欠ける内容に食いついてこない。

やがて視線はおのずと俺の方に集まってくる。おずおずと上目遣いに見つめてくるチルハに、キラキラと目を輝かせる柊。柊は頬を上気させ、千紗と留美奈は事を静観。湊はやや不機嫌に、早く説明しなさい、と視線で促す。

はぁ………、と深くため息をつき、渋々と説明を始めるのだった。

）
）

「つまり、昴の持つ幸運を、他人を介して昴自身が享受するために伴侶、もしくは恋人が必要ってことなのか。……どつかのエロゲみたいな設定だね」

「設定言うな。……もつとも、昴の持つ不幸を相手が被るする事もあるからのう。不幸が尽きるであろう、卒業時が狙い目かの。不幸に相当の耐性があればフライングも可だがの」

「というか、俺は別に恋人も伴侶も必要ないと言っているだろう」

そもそも、そんな浅ましい利己的な目的で相手と共になるなんておこがましい真似ができるものか。

相手が自分のことを想ってくれているのなら、尚更。

「真面目だのう……。おなごの一人や二人、引っかけたとてバチは当たらぬぞ？」

「黙れ。……そもそも、不運が尽きると言つのなら、そのまま幸運を享受できるんじゃないのか？」

不幸が先に集中しているだけ、とかなえは言った。ならば、何もせずとも不幸が尽きればその後は幸運を享受できるのではないのか。かなえはキョトンとしてから、何やら得心がいったようにポン、と掌に拳を乗せた。

「昴。お主、自身の幸運を享受できぬ体質のようでの。不運が尽きれば、幸運のみを撒き散らす座敷わらしと化す」

「なっ——！？」

とんでもないことを抜かしてくれた。

なんだ、それは。

なんなんだ、それは。

それじゃ、俺が幸福を感じていたあの時。俺自身に直接幸運が作

用していた訳ではなく、隣にあいつがいたからこそ、俺は幸せで。幸せを与えてくれたあいつを、他ならぬ俺自身の不幸で、裏切ったというのか――。

「故に、必要なんじゃないよ。お主と共に添い遂げる伴侶が。伴侶の幸せがお主の幸せとなり、お主の幸せが伴侶の幸せとなる」

「おお、幸せスパイラルだね」

「んむ。良いこと尽くめだの。だから、ほれ。さっさと良い相手を見つけて、幸せになれ。の？」

かなえの、珍しく含みのない、本当に俺の事を思いやってくれていると一目で分かるような、そんな優しくで柔らかな美しい笑みを見ても、俺の心は動かなかった。

それどころではなかったのだ。

どこまで罪深ければ気が済むんだ、俺は。本当に、救いようがない。

自分の不幸が尽きるから、相手は不幸にはならない？ それはどうした。

そもそも。

俺が幸せにならなければならない理由なんて、いったいどこにあるというんだ。

家族を死に追いやり、あいつに一生癒えない傷を負わせた俺が幸せになる権利が、いったいどこにあるというんだ。

これは、罰だ。

不幸を享受する気はないが、幸せを享受する気も、さらさら無い。不幸は神のせい？ 知ったことか。

護れなかったのは、俺だ。弱かったのも、俺だ。不幸ごときに、神ごときに屈して、何よりも大切な存在を失ってしまったのも、俺

なんだよ——ッ！！

「落ち着け、昴」

ペシリ、と。かなえに頭をはたかれて、俺は正気に戻った。
頭を押さえながらかなえを見上げると、呆れ顔でため息を吐いていた。

「まったく。虚勢を張り付けていても、自虐的なところは変わらぬのう、お主は。」

——よいか、昴。幸せになる権利は誰にだってある。お主が責を感じる必要は、どこにもない。あるとすれば——」

——それは他ならぬ、妾なのだからの。

そう言ったかなえの顔は、やけに悲しげで。今度こそ俺は、かなえに目を奪われたのだった。

「……それは、どういう——」

「どうでも良いけど、お二人さん。女性陣がさつきから何やら不穏な気配を放ってるんだけど」

なに？ と二人揃って先程から妙に静かな湊達を見やる。

「すーちゃんのお嫁さん……ほわあ……」

「い、いけませんそのような事……。で、ですが、その。昴様のためなら……」

「かいちよーの奥さん……。つまりそれはかいちよーの匂い嗅ぎほーだいと言うわけで。何それ天国？ あ、じゃあじゃあ、かいちよーは天使なのかー。なっとく」

「昴君のパートナー、か……。元々許嫁なんだけどね。ふふ、でも、悪くないなあ……」

「……いい？ これはあくまでも昴のため。私個人の感情は全くこれっぽっちも関係ないけれど、昴がこのままじゃ幸せになれないっていうのなら……うつ……」

何故か全員暴走していた。湊までも。

頬に手を当て身をくねらせ、何やらわけのわからない事をブツブツと呟いている。

「うわあ………」

「これはひどい………」

ドン引きする留美奈とかなえ。

というか、どうしてこうなった。

すると、何を思ったのか、かなえがニヤリと口の端を歪める。ああ、コイツまた何か要らぬ企みを思い付きやがった。

「どうかの？ せっかくじゃし、この件を学園中に広めて、昴の恋人候補を募集して、競わせる催しを起こすというのは」

「おい、お前もう黙れ。だいたい、そんなものに人が集まる訳ないだろう」

「……その発想はなかったわ。ぐっじょぶ、かなえ様！初めて信仰心が芽生えた！」

「んむ。崇め崇め。何故なら妾は偉いから！」

ああ、もう。人間台風の標的が定まってしまった。

止める間もなく、千紗は生徒会室を一目散に出ていった。向かう先は理事長室だろう。一心さんが却下してくれることを切に願うが……無理だろうな。あの人、こういう馬鹿騒ぎが好物だし。

この祖父にしてこの孫あり、か。父親はまともなのに。嫌すぎる
隔世遺伝だった。

燈ノ宮千紗の生徒会における役職。

生徒会特別顧問。

またの名を、悪戯専門機関。

千紗が黙り込んでいたのは実のところ、次に何をするか悩んでい
ただけであつて。

かなえとの相性は、ある意味最悪だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855/>

腹黒神様と不幸な少年

2011年10月6日21時26分発行